

なかを喜久子を促して改札口の方へ出ていつたが、喜久子はひどく人を恐れて、なるべく顔を見られないやうに暗い物陰を歩いてゐた。改札口のところには頭からすつぽり外套を被つた巡査が立つてゐたが、格別此方を迂散臭さうに見返るでもなく、黙つてゐた。

敬次郎も巡査の姿をみるとひよつとしたら咎められやしまいかと思つておつおつ胸を躍らしてゐたが、何事もなくその前を通ることが出来たのでほつとしてあとから出て来る喜久子を待たつた。

二人は停車場を出ると眞暗な町を當てもなく大通りの方へ歩いていつた。敬次郎は中學時代に修學旅行で一度甲府へやつて来たことがあるので、それでも方角だけは知つてゐた彼は喜久子に逢つたために車中で買つた辨當もそのまゝにしてしまつたので、腹は痛いほど空く、それに酔ひ醒めの寒さは魂の底まで滲んで来た。

#### 五十四

敬次郎は暗い町をぶらぶら歩いてゆくうちにふつと又こんな考へが湧いて来た。もしこのまゝ、何處かへ宿をとるとすると、朝が早過ぎるだけに人の疑ひを買ふ譯になる。殊に今頃着く汽車は名古屋松本方面から来た今の列車ばかりなので、もし推定され、ばすぐ先が分つてしまふ理窟である。そこで彼は何とかして朝になる迄時を消して、その後で宿屋へ入りたいと思つた。

敬次郎はその譯を喜久子に話して聞かせたが扱て行く先がないので仕方がなしにそのまゝ、城跡の公園へ上つていつた。暗い、足許の悪い道をやつとのことであらうへ、上つて、吹き曝らしの吾妻屋を見付けだして兎に角そこへ竝んで腰をかけた。

曉方の寒氣は腰かけた椅子の板から骨をさすやうにしくしくと冷え上つて来る。凍えたやうな風は時々石崖の下から聲もなく吹き上げて来て、とみると四邊の芝草や捨石のうへには



眞白な霜の降りてくるのが分るやうであつた。

敬次郎は肩をちぢめながら、

『實に寒いなあ。』と、慄へ聲で呟いたが、喜久子は返事もしない。じいつと眼を据ゑてみると、彼女はマントのなかで丸くなつて、何を思ひ出してか聲を忍びながらしくしく泣いてゐるのであつた。

その時の心持ちは何と云つて譬へたらよからう。何處かへ行き詰めたやうな、悲しみの底へ蹲まつてゐるやうな、敬次郎にとつては到底一生涯忘れることの出来ないやうな心持ちであつた。

そのうちに東の方の高い山々の頂きからはほんのりと曉が白んで来た。斷層をなした雲の群は漸次と蒼白い光から乳色に變つて、それが紅く爛れくる時分にはもうそろそろ町の家並みや、樹立や、それから遠い町外れの田畑や村里の家々までも刻々に夜の闇の底から眼ざめて来た。笛吹川もいつかしら寒靄の底に遠白くみえて来た。

四邊がすつかり朝になつてしまふと、敬次郎はもうさすがにさうしてはゐられなかつた。口をきく元氣もないほど五體が冷え渡つて、ともすると激しい疲労の極睡眠を催してくる。で、彼は六時半頃になると思ひ切つて喜久子を促してその吾妻屋を出た。

町はもうすつかり夜の眠りから覺めてゐた。敬次郎は見覚えのある大通りへ出て、やがて佐渡幸旅館の方へ歩いていつた。小さい宿屋などには却つて足がつき易いので、彼は兎も角も大旅館へ落着くことにした。

佐渡幸へ来てみると、早立ちの客があると見えて、大立關にはちやんと朝の支度が出来て、番頭が忙しさに働いてゐた。敬次郎は大風な顔をして喜久子を後に従へてその門を入つた。

出迎へに出た番頭は喜久子のマント姿が異様なので怪訝な顔をしてみてゐたが、それでも愛想よく會釋をして、奥二階の可成りな座敷へ連れていつた。やがて持番の女中は火を運んで来る、熱い茶をもつて来る。敬次郎は何より先に飯を食はして呉れといつて、そつちの支



度を急がせた。

その朝の食事も敬次郎にとっては忘れられないもの、ひとつであつた。餘りに思ひがけない逢遇が今更のやうに不思議に思はれて、臆病なおぶおづした態度で箸をとる喜久子の姿をみると、敬次郎は夢のやうな氣がするのであつた。女中は何と思つたか、敬次郎のことは若旦那と呼び、喜久子のことはお嬢様と呼んだ。それほど二人の態度が初々しく、無邪氣らしく見えたのであつた。

飯が済むとすつかり元氣が恢復したので、敬次郎は温かい日の射す窓の方へ火鉢を寄せて、喜久子と對向ひに坐りながら又いろいろと彼女の身のうへ話しを聞いた。その時にはもう彼女も兄に對するやうに打融けてゐたのであつた。

## 五十五

その日は一日佐渡幸の二階座敷でゆつくり寛いで話をするつもりでゐたが、扱て落着いて

みると何となく氣がそはそはしてならなかつた。此處にゐればまさか見出される氣遣はなからうとは思つてゐながら、絶えず何かに障子の向ふから差覗かれてゐるやうな氣がしてならぬ。漸次日が西へ傾いてくると同時に、その不安は益々増大して、何うしてもじいつとしてゐられなくなつて來た。

そこで敬次郎は又先の計劃にかゝつた。これだけ息を抜けば大概大丈夫であらうからといふので夜に入るとすぐ宿屋を出て俥で石和まで行つて、そこから八王子ゆきの汽車に乗つた。そして八王子から又別な列車に乗り換へて、晩の十時前に東京へ入ることにしたのであつた。先々と考へてのくと妙に智慧が出て、此れならば如何に追手が苦勞をしても大概は無事に切り抜けられるだらうと思つて、却つてそれが面白くなつて來た。

石和で汽車に乗る時も、八王子で下車する時も彼等は怪しい者に出會はさなかつた。彼等は、その停車場でその次の飯田町行の列車が仕立てられるのを待つて、又それへ乗り繼いだ。その列車が新宿驛へついたのは丁度九時四十分であつた。すつと飯田町まで乗り續けてし



まへば便利べんりのだが、ひよつとして追手おつてがそこで網あみを張はつてゐると恐こわいので、彼等かれらは態わざとその驛えきで下車げしやして、そこから市内しんないの電車でんしやに乗のるつもりにした。

驛えきを出でると敬次郎けいじらうはさもほつとしたやうに、

『ねえ、君きみ。もう大丈夫だいじやうぶだよ。もう此處こゝまで來きてしまへば何が追おつかけて來きても分わかりやしない。』と、まるで虎口こゝろを脱だつしたやうに云いふ。彼はもうたつた一日いちにちのうちにそれほど親したしけな口くちがきけるほど打明うちあけあつてゐたのであつた。

喜久子きくこも我われを忘わすれて、子供こどものやうに打喜うちよろこびながら、

『ほんとにもう大丈夫だいじやうぶで御座ございますわねえ。私あたしこんな嬉うれしいことは御座ございませんわ。』と、云いつて、いそ／＼しながら、『それと申まをすのも皆みんなな若旦那わかだんなのお庇護おかげで御座ございますわ。何なにんとお禮れいを申まを上げたらよろしいでせう。』と、心こゝろの底そこから云いふ。

敬次郎けいじらうは煙草たばこに火ひを點つけながら、

『いや、お禮れいなんか云いはれると却かへつて僕ぼくの方が恐縮おそろしゆくしてしまひますよ。』と、云いつて、喜久子きくこ

の方はなを振顧ふりかへりながら、『それはさうと付き、此こゝれからどうするの？ 矢張やっぱりこれからすぐしたに下谷したやの

小母おははさんのところへ行くの？』と、訊きく。

喜久子きくこは何なんとなく去就ききうに迷まよつたやうに、

『え、まあさう致いたすより他ほかに仕様しやうがないだらうと思おもひますわ。』

『そうしてずつと小母おははさんのところで厄介やくかいになる氣きなの？』

『さあ、それは一遍ぺん小母おははさんに逢あつてみませんことには、……。』さう云いひながら喜久子きくこは何處どこかに敬次郎けいじらうと別わかれるのが寂さびしいやうな素振そぶりをみせる。そのいたいけな様子やうすが實じつに可愛あいかつた。

敬次郎けいじらうは黙だまつてしばらくの間考あひだかんがへながら歩いてゐるが、やがて何なにか思おもひ極きまめたやうに、

『ぢや喜久子きくこさん、僕ぼくもどうせ本郷ほんかうまで行くんだから、兎とに角下谷かくしたやまで送おくつて行いつて上げませう。』と、云いふ。

喜久子きくこは氣きの毒どくさうに、



『でもそれではあんまり、……。』

『いや、僕はどうせ今夜は友達の下宿へいつて泊るんですから、少し位遅くなつたつて構は  
んです。それに折角此處まで一緒に来たんだもの、君の行く先まで見届けないと僕だつて安  
心が出来ないからね。』

喜久子はもうそれを辭するだけの言葉を持たなかつた。彼等はやがて上野行の電車に乗つ  
た。敬次郎にも喜久子にも久振りの東京なのでもうそはそはしてゐた。

## 五十六

喜久子の知己の小母さんの家といふのは湯島天神のすぐ下にある細路次のなかにあつた。  
兩側は同じやうな建てかたの二階長家で、そのなかには藝者屋もあれば、遊藝の師匠のやう  
なものも住んでゐた。その路次の突き當りのところにある格子戸のはまつた、古びた家が小  
母さんの家であつた。軒先には吳服太物佐竹と書いた圓い軒燈が出てゐた。

喜久子はその格子戸を開けて、

『御免』と云ひながら様子を窺つてゐた。敬次郎は何んだか人に顔を見られるのが耻かしい  
ので、戸袋の陰のところへ隠れてゐた。

なかでは年老つた女の聲がそれに答へて、やがて上り框の障子をさつと開けて五十格好の、  
下町風の内儀さんが顔を出す。それをみると喜久子はさも懐かしさうに、

『まあ、小母さん。私よ。お霜ですよ。』と、云ふ。その聲でさも吃驚したやうに、小母さん  
は思はず眼を据ゑて、

『おやまあ、お霜さん、ほ、ほ、ほ。ほんとに珍らしいのねえ。い、え、私やもうお前さん  
が今にも訪ねて来るだらうと思つて家の人と一緒に首を長くして待つてゐたところさ。まあ、  
お上りよ。こ、ちや話も出来ないから。』と、いふ。

喜久子はそれを聞くと首を傾けて、

『まあ、ちや小母さん私が来るのを知つて被居つたの？ 變ねえ。どつしてそれが分つて？』



小母さんは起ち上りながら、

『それにやいろいろ譯があるのさ。まあ此處ぢや何んだからお上りなさいよ。』と、云つて、奥の方を向きながら、『ねえ、お前さん。お霜さんが來ましたよ。』と、聲をかける。

奥の座敷からは今度は年老つた男の聲が、

『さうかい。さあ、ずつとお上り。』と、云ふ。

喜久子はそれを聞くと、

『え、有難う。』と、合點いて、又そつと格子戸から後を振向いて、そこに立つてゐる敬次郎の顔を見ながら、

『あの、失禮でございますけど、貴方も一寸お上り遊ばして下さいました。何も御遠慮のいる家ぢやございませんから。』と、云ふ。

敬次郎はいかに何んでもその家へは上れなかつた。で、帽子の庇へ手をかけながら、

『いや、僕はもう失敬しよう。時間も遅いから。』と、云ふ。

その聲で小母さんも連れがあるのを知つて、上框のところから首をさしのべながら怪訝さうに覗いて、世辭らしく上れと云ふ。

敬次郎は猶ほ氣恥かしくなつて、やがて喜久子を隣りの格子先へ呼びながら、

『あの、僕宿の方の都合もあるから兎に角今夜はこれで失敬します。もう此處まで送つて置けば安心だから何うか何かのことは又小母さんとゆつくり相談して下さい。それに今の小母さんの言葉つきでみると、君が歸つて來るのを前以つて知つてゐたらしい様子だから、何か諏訪の親方の方から消息でもあつたのかも知れない。僕はこれから本郷へいつて泊つて、明日また此處へきてゆつくりいろいろな事情も聞きますから、それまでに何とかあんだの身の振方を極めて置いて下さい。』と、云つて、彼は外套のポケットから一葉の名刺を取出して、それに石井の下宿の處番地を書いて渡す。

喜久子はひどく氣の毒さうな、別れともなさ、うな顔をしてゐたが、併したつても云ひ兼ねて、いろいろ道中の厚い情を感謝したあとで、



『それではあのまことに申兼ねますが、何うか明日又お眼にかゝれるやうになすつて下さいましな。私なただか貴方にお頼り申してゐると安心なやうな氣が致しますもんですから。』と云ふ。敬次郎は黙つて合點いた。

### 五十七

敬次郎は小母さんの家の門口で喜久子に別れると、そのまゝ電車通へ出て、湯島の阪下から電車で本郷へいつた。石井の下宿は森川町の宮裏にあつて、對芳館といふのであつた。石井は家から學資も餘り澤山貰つてゐないので、大學生としては極めてみぢめな生活をしてゐた。對芳館も大厦の並んだなかでは頗る見すばらしい下宿であつた。

石井は夜遅くまで勉強する方なので、敬次郎がいつた時には、暗い電燈の火影で相變らずせつせとノートを調べてゐた。少しも邊幅を飾らぬ彼は國から送つて寄越したもののらしい木綿のごつごつした襦袍を着て、机のうへへ、掩ひかぶさるやうな格好をしてゐた。

敬次郎は張り切つたやうな懐かしさを顔に現はしながら、

『やあ、石井君。しばらくだつた。』と、云つて彼の部屋へ入つていつたが、石井はその聲をきくと悸乎としたやうに振顧つて、につこり笑ひながら、

『おう、安井か、は、は、は、。到頭出て來たな。いや、よくやつて來た。俺はもう此間から首を長くして待つとつたんだよ。』と、云ふ。大きな、でつぶりとした、磊落さうなその顔にはさも嬉れしさうな色が溢れてくる。

敬次郎はブリツキおとしの貧しげな火鉢の前へいつて坐りながら、

『いや、石井君。到頭僕はやつて來たぞ。又先日來からいろいろ君にも心配をかけて濟まなかつた。僕はもう毎日毎日今日は立たう、明日は立たうと氣ばかり急いとつたんだが、やつぱり親父に隠れて出るとなると家が出憎く、てなあ。は、は、は、。併し君も達者で結構だ。』  
『達者も達者でないも俺は此頃又一貫五百匁も體重が増えたよ。まるで上野の西郷さんの銅像だね。は、は、は、。』と、石井は腹の底までみえるやうに笑つて、『そして何か、松本ぢや何



も變つたことはないか。』

敬次郎はいろいろと松本の方の消息を話したりした。先日からぼつぼつ此方へ送つて寄越した自分の荷物が、石井の部屋の壁際へ積んであるのをみると、敬次郎は何がなしに嬉しくなつて、愈々東京へやつて来たのだといふ心持ちから氣はひどく軽くなつて来る。

郷里の方の話が済むと今度は敬次郎のこれから先の問題が語り出された。出京といふことで彼の目的の一段は果たされたのであるから、これから先はすぐさま東京に於ける彼の生きてゆく方法を考へなければならなかつた。

石井はやがて苦もなさ、うな顔をしながら、

『おい、安井。その點に就いちやもう何も心配する必要はないんだよ。君が苦學をするといつて寄越したんで俺もひどく感奮してなあ、實は或方面へ運動をしてちやんと奉公口をこしらへて置いたんだ。君は俺などのやうな體と違つて、極めてお上品な蒲柳の質だ。は、は、は。こんなことを云つたつて、怒つちや可かんよ。そんな體ちや正直のところ到底苦學なん

が出来るもんぢやない。自分ちや氣が立つとるから新聞配達でも牛乳屋でも何んでもやるつもりだらうが、しかし事實に於て君の健康がそれを許さんのだ。俺はそこを見たから、實は成る可く君にとつて容易い道をとつてやらうと思つて、樂な食客の口を捜しといてやつただよ。』と、云ふ。

敬次郎はいつに變らぬ石井の親切が涙の出るほど嬉れしかつた。實は彼とても出づ後の生活法に就ては少なからず心を悩ましてゐたのであつた。如何に苦學をするといつても、それには自らその道がある。それを捜すだけでもい、加減な苦勞をしなければならぬ。それに石井が食客の口を捜して置いて呉れたのは敬次郎にとつては何よりも嬉れしい所置であつた。彼は涙ぐんで喜んだ。

## 五十八

石井が捜して置いて呉れた食客の口といふのは、石井がよく出入する柳田といふ大學の助



教授の家であつた。柳田はつひ此間歐羅巴から歸つて来たばかりの醫學博士で、まだ四十にやつと手の届くか届かないくらいの若い教授で、今も猶ほ獨身であつた。家は小石川の高臺にあつて、主人の好みで新たに設計された洋館建てであつた。柳田はそこで年老つた料理人と書生とたつた三人で極めて寂しい男世帯を營んでゐるのであつた。

石井はつひ二三日前に柳田の家に遊びにいつて、それとなく敬次郎のことを話した。と、柳田も昔は可成り苦しい思ひをして苦學をした経験があるので、彼は一も二もなく同情して、それなら人物さへしつかりしてゐれば、たとへ學ぶ専門學科は違つても、是非家に置いて世話してやり度いといつた。石井はそれを聞くと我が事のやうに喜んで、すぐさまよろしく願ふと云つて、その約束を極めてしまつた。それもひとつには柳田が石井を非常に愛し且つ信じきつてゐるから、さう云ふことも出来たのであつた。

石井は吸ひさしの煙草へ又火をつけながら、

『いや、柳田といふ教授は實に愉快な人物だよ。非常に理智的な、冷たい一面を持つとると

同時に、又妙に人懐しいやさしさがあるんだ。俺は教授のなかで一番好きなのだ。大學ちや胎生學と遺傳の講座を持つとるが、又そつちの方から云ふと非常な篤學家でなあ、大學へ來る新しい醫學の本で大抵柳田先生の眼を通さんものはないと云はれとるくらゐなのだ。君は彼處に居りや何よりだと思ふ。勉強する餘暇は充分與へて呉れるといふし、それに用といつてもほんの掃除ぐらゐのことだからなあ。』

敬次郎は聞けば聞くほどい、口なので、ひどく喜びながら、

『いや、そりや却つて善過ぎるくらゐだ。何から何迄君の世話になつて、實に感謝の言葉もない。』と、云つて、氣が急ぐやうに、『併しさう極まつてゐるとするといつからその柳田先生のお宅へいつたらいいだらう。』

『さあ、まあ、今夜は穢いところだけど、このまゝ俺の下宿へ泊つて、明日二人で行かうぢやないか。さうしてまたあの條件などもゆつくり先生に逢つて極めようと思つとるんだ。』敬次郎は嬉れしさうに合點いて、



『ちやさうして貰はふ。君が一緒に行って呉れりや此上なしだからなあ。』と、云つて、煙草に火をつけながら、『いや、それにしても今度は僕も大いに發奮して、出来るだけ勉強をしようと思つとるのだ。國へ歸つたお庇護でたうとう一年だけ棒に振つてしまつたからなあ。考へてみると實に残念で耐らんのだ。』

石井はそれを笑つて、

『は、は、は、。たつた一年ばかり何うでもなるさ。人間の一生は短いやうで長い。そのなかで何もさう齷齪するには當らんさ。一體今の人間は皆成功を急ぎすぎていかんと思ふ。そこへいくと俺は牛歩主義だからなあ。は、は、は、。』

敬次郎も笑つて、

『いや、兎に角いづれの道を辿るにもせよ、成功しさへすりやい、んだ。人生は長いかも知れないが、青春の時はたしかに短かい。僕はそれを惜しむのだ。』

『は、は、は、。君はなかなか本を讀んどるから、そんな點に對しては極めて敏感だらうと思ふ。』

ふ。俺のやうな不粹な不風流漢とは又自ら違つた解釋も生じて來るだらうと思ふ。』と云つて、

『それはさうと。君の許嫁はあの後別な候補者はないのか。君があんまり長く國を出て來るので、俺は内々そんな事情もあるのぢやないかと思つとつたんだ。』

その時、外の廊下でふと慌たしい足音が近寄つて來た。

### 五十九

敬次郎は何か答へようとして口を開いたが、その時、廊下の足音がすつと石井の部屋の前へ來て止つたので、彼はふとそれが氣になつて、聞耳を立てた。と、殆ど同時に、外では若い女の聲が、

『御免下さいまし。あの此方が石井さんで被居いますか？』と、云ふ。

石井は無雑作な調子で、



『あ、石井は此處だが、お前は誰れだい？』と、訊き返すと、外では一段と聲を低めて、

『あの、此様なに遅く伺ひまして申譯も御座いませんですけど、あの、此方に松本からおみえになりました安井さんの若旦那が被居つてゐるやいたしませんで御座いませうか？』と云ふ。

敬次郎はその言葉で慌て、立つていつた。障子を開けると外には薄暗い電燈の餘映のなかに思ひもかけぬ喜久子が来て立つてゐる。つひ今しがた別れて来たばかりであるのに、彼女はもう跡を追つて訪ねて来たのである。

敬次郎はひどく吃驚して、

『お、君は喜久子さんぢやないか。一體今頃何うしたといふんだい？』と云つたが、喜久子は彼の顔を見るともう雙眼に溢れるほど涙を湛へて、

『若旦那。こんな遅くお邪魔をしてほんとに申譯も御座いませぬ。あの、實は私急に貴方にお眼にか、つて御相談いたさなけりやならないことが出来ましたもんですから。……』

『いや、喜久子さん。何は兎もあれ、此方へ入り玉へ。何も遠慮のいるところぢやないんだから、構はず入つて下さい。』と云つて、手を執らんばかりにして部屋の中へ入れる。喜久子はそれでも入口のところへ坐つて、小さくなつてぶるぶる慄へてゐた。

石井は呆氣にとられたやうな顔をして、喜久子の顔と、敬次郎の顔とをじろじろみてるたが、やがて何を思ひ違へたかこくりと合點いて、にやりにやり笑ひ出しながら、

『おい、安井。分つたぞ、貴様も實に怪しからん奴ぢやなあ。は、は、は。何よりも先にあの娘さんを俺に紹介せんけりや可かんぢやないか。今迄黙つてゐるとは貴様もほんとに仕様のない奴だ。』と云ふ。

さう云はれると敬次郎はもう耳の附根から眞紅になつて、

『いや、石井。君は何か思ひ違へをしてゐるんだ。此處にゐるこの娘さんは、君が今云つた例の許嫁でも何んでもないのだ。この人の身性を話したら君はきつと驚くに相違ない。』と云つて、彼はすぐさま喜久子の身のうへを掻い抓んで石井に話した。松本へ興行に来たこと



から、上京の途中の車中でゆくりなくも邂逅したこと、それから湯島へ送つていつたことまですつかり話して聞かせた。

石井は圓らな眼を据ゑてまじまじしながら聞いてゐたが、やがて自分でも可笑しくなつたやうに笑つて、

『は、、、。さうか。そりや俺の思ひ過ぎだつたなあ。いや、こりや失敬。君は喜久子さんといふんですか。まあ、此方へ寄り王へ。夜が更けて来たから、火鉢の傍でないと寒いから。』と、頭をかきながら喜久子の方へ云ふ。

喜久子はやがて二人にすゝめられて、火鉢の傍へ居坐り寄つて来た。その顔は妙に若々めてゐて、此處までとるものも取り敢へぬやうに大急ぎで騙けつけて来たやうな様子である。

敬次郎は石井が机のうへへ、出したまゝにしてゐる茶道具を此方へ引寄せて、自分で茶を入れて喜久子に吞ませてやつた。と、喜久子も稍落着いたやうに顔を上げたりしたが、やがて此處で打明けて話をしてもいゝだらうかと訊ねるやうにじいつと敬次郎の顔を見詰める。そ

の様が何とも云へず傷はしかつた。

## 六十

敬次郎はその顔をみると却つて自分の方から口を切つて、

『それはまあいゝが、喜久子さん、一體何うしたんです。こんなに遅く僕のところへ訪ねてくるには何か理由があるでせう。何も遠慮する必要はないから話して下さい。』と、いふ。

喜久子はやつと顔をあげて、もう何も彼も打明けてしまふやうな調子になりながら、

『あの、若旦那。それでは私すつかり申上げてしまひますわ。實はあれから貴方がお歸り遊ばしでからあとで私小母さんにいろいろ話を聞きましたんですの。と、貴方、驚くぢや御坐いませんか、あの諏訪の親方の方からもうちゃんと言つて居りました、つひ今しがたになつて、私が歸つて來てるやしないかといつて又様子を搜りに來た人があるんで御座いますの。』



敬次郎はさすがに吃驚して。

『へえ、もう手が廻つてゐるのかね。實に早いもんだなあ。油断も隙もなりやしない。』と、云つて、喜久子の顔をみながら、『それでその様子を見に来た男といふのは一體何者なんですか？ 矢張り諏訪にゐる一座のなかの人なんですか？』

『い、え、それがあのさうぢやないんで御座いますの。あの、浅草の方の元締めのところにある破戸漢で、始終矢張り私達を窘めてばかりゐる人なんですの。諏訪の親方からそつちへ電報でも打つたものとみえまして、早速東京の心當りを尋ねて歩いて今日の夕方に小母さんのところへも参つたんださうで御座います。』

『ふむ、實に手廻しがいい、ねえ、さすがはあ、した社會だけあつて、ちやんと筋道がついてゐるんだねえ。』と、石井も傍から感心する。

喜久子はやがて涙ぐんだ眼でじつと敬次郎の方をみて、

『で、あの若旦那。私も小母さんに今度此方へ遁けて來ました譯をすつかり話しますと、小

父さんも小母さんも大變に同情して呉れまして、さういふ事情なら何も向ふの云ふことばかり聞いてゐる必要はない。浅草の師匠のところへいつて、最初の契約の時の筋をつめて、もともとにして貰へば何も云ひ分はあるまいと申して、實は小父さんが明日浅草の師匠のところへ参る筈になつて居りますんです。ところがそこへ元締の方の男は契約がまだ切れない前に私が遁けたんで、親方の方では興行は出來ず莫大な損害を受けたからと申して、何んですかひどくやかましく申して参りましたんです。で、小母さんはその男が坐り込んでどうしても歸りませんので、私に今夜ひと晩だけ何處へでもいつて姿を隠してゐる、明日になつたら何とか話をつけてやるからと申して、私を臺所口からそつと遁がして呉れましたんです。私もそのまゝ、戸外へ出てみましたもの、御存知のやうな譯ですからもう何處へ頼つてゆく處もなし、泊る家はなし、私ほとほと困つてしまひましたの。で、いろいろ考へました末、あんまり無様とは存じましたが、外にしようもないもんで御座いますから、私到頭此方へ伺つてしまひましたの。』と、云ふ。その言葉尻には途方に暮れたやうな心細さの涙がひひ



てゐた。

敬次郎も石井もそれを聞くとひどく可哀想になつて、いろいろに彼女を慰めてやつた。もう何も心配することは無い。湯島の小父が師匠の方と談判をきめて呉れるまでは何とでもして保護してやる。こゝへ隠れてゐれば第一湯島の小母さんでさへ知らないものであるから、いかに元締めの方で捜したとて當てがつくものではない。そして敬次郎はあれから飯も碌に食べないので、さぞ腹が空いたらうと云つて、熱い饅飩をとつてやつて喜久子に食べさせたりした。

その晩敬次郎と喜久子はそのまゝ、貧しい石井の下宿に泊つて、彼の部屋へ三人枕を並べて寝た。喜久子は身の行末を思ひ出してか、眞夜半すぎまで頻りにしくしく蒲團のなかで泣いてゐた。

## 六十一

その翌日になると、敬次郎は何うしても一度これから世話になる柳田教授のところを訪問して置かなければ義理が悪いので、丁度幸ひその日は土曜ではあるし、午後から石井に連れられてそつちへ行くことにした。喜久子は朝になると、さすがに極りが悪いやうな顔をして、隅の方へばかり引込んでゐた。敬次郎は成る可く居憎くないやうにしてやらうと思つて、頻りにいろんな話を持ちかけたり、氣を浮かせるやうに仕向けたりしてゐた。

午飯をたべるとすぐに敬次郎は柳田教授を訪ねる譯を喜久子に話して二時間ばかりで歸つて来る故、晝寢でもして留守をしてゐてくれと云つた。それでも喜久子は何かしら心細さうな顔をしてゐたが、二人はそれを見捨て、兎に角下宿を出た、敬次郎は又歸つてから夕飯の時にでもゆつくりいろ／＼なことを話さうと、それを樂みにしてゐたのであつた。

柳田教授の家は敬次郎の現在の境遇にとつて殆んど理想的な口といつてよかつた。だらだ



ら坂になつた町から入つてゆくとすぐ往來の右側に瀟洒とした洋館が建つてゐる、その様子からして敬次郎にはひどく氣に入つてしまつた。丁度英國の町外れにでもありさうな二階建ての明るい建築がそこに住む先生の人格まで思はせるやうで、敬次郎はひと眼みただけで耐らなく嬉れしかつた。

柳田教授はすぐ逢つて呉れた。彼等はそのまま、玄關から書齋へ通ることを許された。書齋は二階の角にあつて、家の他の部分の質素な割りにそこばかりは凡ての設備が整頓してゐた。大きな書棚には背の黒い洋書が金文字を光らせながらぎつしりつまつてゐる。又白いペンキで塗つた硝子棚には病院の手術室でみるやうな大型の顯微鏡やらキラ／＼した金屬でつくつた實驗具が一面に飾つてある。室の隅には瓦斯を仕懸けた大理石の卓もあれば、水を扱ふ場所もこしらへてある。こゝは教授の書齋であると同時に實驗室も兼ねてゐるのであつた。

教授は北面した窓のところへ別に小卓を据ゑて、そこで瓦斯ストーヴにあたりながら、悠然と葉巻を吸つてゐた。彼はいつも着てゐる外套のやうなハウスロツクを着て、鼻眼鏡をか

けてゐるので、その若々しい顔がどうしても歐羅巴人のやうにみえる。一寸みるとハイカラのやうで、よくみてゐると何處かに精悍な野性を帯びてゐるやうな人柄であつた。

二人が入つてゆくのを見ると教授はにっこり笑つて、一揖しながら、

『さあ、石井。そんなところに立つてゐないで、そこにある椅子をもつて、このストーヴのところへ來い。おい、君もこゝの家へ來て遠慮しちや駄目だぞ、は、は、』と、敬次郎の方へ云ひながら笑ふ。

石井はいつものこと、みえて、いきなりそこにありあふ椅子を持つてストーヴの方へいつて坐を占める。敬次郎も石井と同じやうに振舞つて兎に角ストーヴのまわりへ寄つていつた。

石井は例の無雜作な調子で、

『先生。こりや先日お願ひした僕の友人の安井です。どうかよろしくお願ひいたします。』と云ふ。

教授は又にこにこ笑つて、敬次郎の方を見ながら、



『いや、君がさうか。失敬なことを云ふやうだが、君は美貌を持てる青年だね。いや信州にも君のやうな優美な型があるのかね。は、は、は、』と、笑つて、石井の方をみながら、『たしか君は法律の方だとか云つたな、僕とは専門は違ふがそれさへ構はんけりやいつでも置いてやるよ。そのかはり此家は萬事が西洋式だから困るぞ。第一君は西洋式の便所に耐え得るか。は、は、は、』

## 六十二

初対面からかう打明けられてしまつたので、敬次郎の方も悪堅い、四角八面な態度がどうしても執れなくなつてしまつた。彼は青年らしい興奮をその眼に輝やかしながら、いろいろ自分の將來の希望なども臆するところなく教授に語つた。教授は如何にも同情のある打融けた心持ちで一々それに批評を加へたり、助言をしたりして呉れた。唯教授が戒めるやうに再三口にしたのは不誠實であることであつた。どうせ人間の能力には限りがある、やつて出来

ないものは仕方がない、唯何事に對しても誠實であらねばならぬといふのが教授の考へらしかつた。

教授はすつかり話を聞いてしまふと、又新たな葉巻に火を點けながら、

『それから君にもう一つ是非聞いて置かんけりやならんことがあるが君はもう戀愛の嵐時代は経過したのかね？』と、眞顔で訊く。

敬次郎は餘りな問ひ方なので、今度はさすがに稍どぎまぎして返事に困つてゐると、教授は大きく笑ひながら、

『は、は、は、さう恥かしがるやうぢやまだ石井同様童貞なのだらう。君のやうな美貌をもつとると實に危険だよ。兎に角女といふ奴は悪魔だからねえ。』と、いふ。

石井はそれを傍から引取つて、

『いや、ところが先生、この安井はなかなかさうぢやないんです。此男には美しい許嫁がありましたな、それが去年病氣で亡なつたので、その間には中々小説的な事實があるんですよ。』



現に今度此方へ出て来る時にも……』と、云ひかけて、彼はぢろりと敬次郎の方をみたが、敬次郎がそれだけは云はないやうにと哀願するやうな眼つきをしてるので、石井も氣の毒になつて、『は、は、は、。安井、まあ、あれだけは先生に祕密にして置かうなあ。曝露するにしては事件が餘りに新らしすぎるからなあ。』

教授は好奇心の燃えた眼光をして、

『何もそこまで話してから祕密にする必要もなからう。おい、石井、男らしく云つてしまへ。君も可怪しな男だな。』

石井は頭を搔いて、

『いや、そりや話してもいいですが……』と、云つて、敬次郎の方を見ながら考へてゐたが、やがて思ひ切つたやうに、『いや、何んでもないのですよ。實はね、その亡なつた許嫁によく似てゐるとかいふので、安井が可哀相な境遇にゐる曲藝師の娘を故郷から救つて連れて來たのです。先生、全くあ、いふ社會に居る少女なんていふものは實に人間として最下級の

待遇を受けとるものなんですなあ。』と、云つて、石井は今度はあべこべに自分の方が興奮して、例の喜久子に對するさまざま哀話を語りだした。

教授はさも面白さうにその話に聞き入つてゐた。敬次郎は何事にもあけすけな石井のこととて何を云ひ出すかと思つて初めのうちははらはらしてゐたが、しまひには自分も漸次その感激に引入れられて、いろんなことを教授に語つて聞かせた。教授も歐羅巴の天地を國から國へ漂泊して歩く憐れなジプシイの女の話などをして頻りに氣を入れて聞いてゐた。

教授はやがて口を入れて、

『併し、安井君。それでその娘のことはよく分つたが、併し君はその娘をこれから先どう所置しようと思つとるのだね。君自身が既に衣食の道から搜してかゝらなければならぬやうな現在の境遇にゐて、どうして君はその娘を完全に保護していけると思ふ。僕はその點が聞き度いのだ。』

敬次郎はもう喜久子のこと胸が一杯になつて來たので、つひ情熱に驅られながら、



『いや、私は何ういふ手段を取つて、もあの娘だけは救つてやらうと思つて居ります。その方法は一寸此處では申上げられませんが、……』

### 六十三

それを聞くと柳田教授はひどく眞顔になりながら、

『いや、安井君。その點に就いては是非僕にひと言云はして呉れ。そりや君がその娘を救はふといふ行爲はまことに結構だが、併しもし君が僕の意見を徴するとすりや僕は絶対に不賛成だ。忌憚なく云へば、君がその娘を救はふといふ眞の動機は決してその境遇に同情したからばかりではない。つまりその娘が死んだ許嫁に似るといふ一種の色情的な、不純な心持ちから來とるのだ。さうとすると君と君と君との娘の關係は近い將來に於てきつと危険に陥る。君の方はいくら道心堅固であつても、女の方が危い。もし君が誠心誠意勉強をしようといふのなら、そんな誘惑の近くにうろろしとつちや駄目だ。』

さう云はれると敬次郎には正直のところ可成急所をえぐられたやうな氣がした。眞實のところ、あの喜久子に對する同情にはいろいろの意味があつて、それは彼自身もよく知つてゐるのであつた。二人の關係は先生に云はれなくとも危険に瀕していくのは前から分つてゐた。もし自分が粉骨碎身學業を勉強しようといふのなら、無論喜久子などには構つてゐられない筈である。第一それだけの餘裕もない體であつてみればそれを自分から口にするのさへ變であつた。

さう思ふと敬次郎は急に氣が滅入つてしまつた。何を云つても理論ではもう自分の行爲は論じられないのである。柳田教授はそれがひどく反對で、戀は戀として享樂するが、併し學業を精勵するために他人の家へ食客に入るほどの覺悟があるならば、自分の生活だけは充分理智的に築きあげて置かなければならぬ。その根據がないと、世話をする者も、世話をされるものも常に不安な心持でゐなければならぬ。その點だけは充分明らかにして置いて貰ひ度いと同時に、又充分敬次郎自身の意志の力に頼り度いといふのが柳田教授の希望であつた。



敬次郎は一言もなかつた。云はれるところは一々尤もである。なかには肺腑を衝かれるやうな眞實もひそんでゐれば、同情の温かさもひそんでゐる。併し、敬次郎にはどうも唯それだけではあの喜久子を捨てることが出来なかつた。もう一步なり二歩なり進んでゐて、若し果たして喜久子を救ふといふことが、自分の生活に危殆を及ぼすやうなら、その時にあの喜久子を捨て、も遅くはあるまい。敬次郎は柳田先生に對してはよく熟考したうへで御忠告の通りにしようときつぱり答へてゐながら、心のなかではそんなことを思つてゐたのであつた。一寸目見得のやうにして三十分ばかり面會して歸るつもりでゐたのについ喜久子の話なぞが出たりしたので、思はず時を過ぎて彼等が柳田教授の家を辭したのはもう四時近かつた。カーテンの蔭からみえる谷の町にはもう薄紅い夕陽の色が流れて豆腐屋の喇叭が冬の夕暮らしい、寂しい心持ちをひひかせながら通つてゐた。

教授は立關先まで態々送つて来て、

『ぢや、安井君。僕の方はいつから來ても構はんやうにして置くから、君の都合のい、日に

荷物を持つて來たらいいだらう。實は今居る書生は故郷の方で何か事情があつて、最近に歸るやうなことを云つとるから、餘り日が経たんうちに來てくれると僕の方は好都合なのだ。』

敬次郎は叮嚀に禮を云つて、

『どうもいろいろ御親切に難有うございます。私の方は明日からでも伺へるのですから……』と、云つて石井の方をみながら『いづれ石井君ともよく相談いたしまして、早速御厄介になりに出ますから、どうか何分よろしく願ひいたします。』

## 六十四

敬次郎は教授の前で叮嚀に辭儀をしてゐるうちにふつと涙ぐましい心持ちになつて來た。人に對して身を屈した世辭らしい言葉も云ひ馴ぬ身には辛く、今迄財産家の息子として誰にも肩身を狭くしたことの無い彼も、もう我れから他人の家の食客に身を落とすのかと思ふと、敬次郎はさすがに耐らなかつた。戶外へ出てからまでも彼は涙ぐんだ眼眸をしてゐた。



小石川の傳通院前の大通へ出るとそこらの街路にすくすくと聳えた大樹も大方は葉をふるひ落として、夕陽の影が斜に佗しくさしか、つてゐる。そのなかを鴉の群が氣忙はしさうに啼きながら翔んでゆくのももの寂しく、豆腐屋の喇叭は谷になつた町の方へ降りていつた。敬次郎はふつと感激したやうに歩きながら石井の手を握つて、

『併し石井君。先生はあ、いふけれど、僕、どうしてもあの喜久子を捨てることは出来ないんだ。先生は僕と喜久子との間に將來戀愛關係でも生れて来やしないかとそれをひどく心配してゐられるやうだが、併し僕はその點だけは決して心配して貰ひ度くないんだ。あの喜久子は僕の戀人となるにしては餘りに境遇が違ひすぎる。僕は將來あの女に對して戀をしようとはどうしても信じられないのだ。僕は妹として彼女を愛するのが最後だと思ふんだ。』さういふと石井は急に磊落に笑ひ出して、

『は、は、は、。安井、明日から先のことをそんなに確信しきつたやうに斷言するのは止せよ。どうせ人間だもの、未來のことはどうなるか分らんぢやないか。今君が斷じてあの喜久子に

は戀ひをせんと宣言したところで、少しも當にはならんさ。は、は、は、。まあ、兎に角出来たら出来た時の話さ。』

敬次郎は冷評されると眞氣になつて、

『いや、そりや君が何といつても僕は誓ふ。僕は斷じてそんな意志薄弱な徒にはならん。それだけはどうか石井君、僕を信じて呉れんか。』

『いや、信ずるも、信ぜんもないぢやないか。柳田先生は第一その戀愛關係を云々したんぢやない。差當つてあの喜久子のやうなものが君の周圍にゐては、君の生活が安定にならんといふ意味でいろいろ注意を與へられたんだと思ふ。』

『それなら猶ほのことだ。僕はあの喜久子が僕の周圍にゐたつても煩はされやしまいと思ふ。』

『いや、君自身は或はさう思つとるか知らんが、端から冷靜な眼でみると、決してさうばかりも云へんぞ。第一、君があゝの喜久子と話したる時の態度をみたまへ。妙に興奮して、そわ



そわと落着かないぢやないか。は、は、は。それよりももしあの女がこのまゝ、君に倚懸つて來てしまつたら、君はどうするつもりだ。君は食客をしようといふ體で、あの女に飯を食はしてやるだけの餘裕があるか。なからう。それが先づ第一の問題ぢやないか。』

敬次郎は黙つてまじまじしてゐるが、やがて熱心な調子になつて、

『いや、石井君。その點に就いては少しも心配して呉れ玉ふな。僕は家を飛び出す時に親父の金庫へ入れる可き金を無斷で持ち出して來たんだ。そのなかの一部分を割けばきつとあの喜久子は自由な身になれると思ふ。さうしたうへで、湯島の小母さんの家へやつて、あすこで何か安全な衣食の道を搜して貰やあい、だらうと思ふんだ。』

石井は急に眞顔になつて、

『おい、安井、その金は幾らばかりあるんだ?』と、訊く。

敬次郎は稍得意さうな顔で、

『百七十圓ばかりある。』と、答へた。

## 六十五

石井は眞面目な顔をしてじつと敬次郎の方をみてるが、やがて考へ深い眼眸になつて、

『安井、そりや君の考へは間違つとるぞ。百七拾圓も金があるのなら、何故君はもう少し發奮せんのだ。その金は無論君の學業のために使はれなくちやならん。それを擲つてまであの曲藝の娘を助けるといふのは不條理極まる話だ。その點はこの俺が飽くまで反對する。』と、云ふ。

敬次郎は不満さうな顔をして、

『何うして君はさういふことを云ふのだ。僕が柳田先生のお宅へ御厄介になれば、その金といふものは當分の間不必要な金なのだ。それであの憐れな喜久子を救つてやらうといふのに何が不條理だらう。』

石井はさう云ふ敬次郎の顔をしげしげ眺めてゐるが、やがて苦笑ひをして、



「いや、安井。君にはその理屈が分らんのかねえ。それぢやもう到底忠告の餘地なしだ。もともとそりや君の金だ。何も俺が愚圖々々云ふところはないさ。君のい、やうに費つたらよからう。」と、云ひすて、すたすた先に立つて歩いてゆく。何か氣に入らないことがあると石井はいつもかう云ふ態度を執るのが癖であつた。強いて人と争ひもせず、勝手にしろといつたやうな冷たい顔をするのが彼の得手であつた。

敬次郎はさう突離されてしまふと妙に心細くなつて來た。石井があ、いふからには何か自分のしてゐることに落度があるのではあるまいか。そればかりではない、石井が何か云つてくれ、ばこそ自分も云ひ募ることが出來て、心強くなつてくるのである。それに彼が黙り込んでしまつては力ぬけがしない譯に悔いかなかつた。

そのうちに彼等はやつと對芳館へ歸り着いたので、敬次郎はもう何も彼も忘れて、唯喜久子に逢ひ度さに大急ぎで石井の部屋へ上つていつた。そして喜久子の笑顔を豫期しながらその障子をからりと開けるとなかには誰もゐない。

手水にでも行つたのだらうと思つて、敬次郎は石井と二人で火鉢に差向ひに坐つて待つてゐるが、なかなか歸つて來ない。そのうちに下女が火を持つて上つて來たので、敬次郎は思ひ切つて訊いてみると、下女は怪訝な顔をしながら、

『まあ、ぢや貴方まだ御存知ないんですか。あのお客様はね、先刻一寸電話をかけて來るつて仰有つて、お出になつて、それから又一時間ばかりしてから何にも仰有らずにお出になつたつきりまだ歸つて被來らないんですよ。何んですか、私二階でみてゐたら、お出になる時に戸外で誰れか待つてゐたやうでしたよ。』と、云ふ。

それを聞くと敬次郎も石井も意外な顔をして、しばらくの間は顔を見合せたつきり口もきけなかつた。敬次郎はやがて慌たいしい調子で、

『その戸外に待つてゐたといふのは何んな人だつたね。君はそれを見たんぢやないのか？』と、訊く。

下女は二人に對してもひどく好奇心をもつてゐるやうに、兩方の顔を見ながら、



『さあ、私わたしはつきり見みないから、よく分わかりませんが、なんでもあすこの電でん信しん柱はしらのところに隠かくれてゐた人ひとが、あの女をんなの方かたを待まちつてゐたんぢやないかと思おもひますわ。一人ひとりは年としを老とつた女をんなの方かたで、もう一人ひとりは若い男をとこの方かたでしたよ。』

敬次郎けいじらうはそれをきくと瞳ひとみを据すゑて、

『えッ、男をとこがゐるた？』と、云いつたが、我われながらはしたないと思おもつたか、稍や顔かほを赧あかめて、『その男をとこといふのはどんな風ふうをしてゐたね？書しよ生せい風ふうか、それとも……。』

## 六十六

さう聞きかれると下女げぢよは困こまつたやうな顔かほになつて、

『あの、私わたしそんなに詳くわしく見みないんですから分わかりませんが、何なんでも男をとこの方かたはあんまり風ふうのい、人柄ひとがらぢやありませんでしたよ。どうみてもかう頭あたまを角かく刈がりにした、遊あそび人じんのやうな風ふうでした。』

敬次郎けいじらうはそこまで聞きくと大方おほかたさうさうの方かたの元もと締とめなのであらうと思おもつた。何どこ處ところをどう尋たづねてこの對たい芳ほう館くわんへやつて來きたのであらうかと思おもふと、敬次郎けいじらうには何なんだか氣き味みが悪わるくてならないのであつた。喜久子きくこもあれほど云いつてゐたのであるから、まさかこの隠かく棲せが知しれる譯わけはない。それにそんな怪あやしげな人間にんげんがふいに現あらはれて來きて、喜久子きくこを連つれ出だしてしまつたのが、實じつに不ふ思し議ぎでならなかつた。

敬次郎けいじらうはそのまま、女中ぢようちゆうを退さがらせて、今こん度どは火鉢ひばちの傍そばへ丸まるくうづくまつて頻しきりに石井いしゐと評ひやう議ぎを凝こらした。

石井いしゐもそれはたしかに小母をはと元もと締とめの方かたの男をとこであらうと推お定ていした。敬次郎けいじらうはさうなると喜久子きくこの身みのうへが心配しんぱいで耐たまらなくなつて、此これから何なにういふ手て段だんを取とつたらい、かといふことを一心しんになつて考かんへだした。その男をとこ達たちがくる前に、喜久子きくこが何どこ處ところかへ電話でんわをかけにいつたといふのが實じつに變へんである。或あるは心細こころほそさの餘あまり少母をはのところへでも電話でんわで居ゐ處ところを報しらせたのではあるまいか。さう思おもふと事じ件けんは益ますますと迷めい宮みやうに入いつて來きた。



石井はしまひには笑ひ出して、顔色を變へてゐる敬次郎の眼のところをまじまじみながら、『おい、安井。何もそれほど心配せんでもい、ぢやないか。今の世の中だもの、どんなことがあつたつて、あの女は殺るされるやうなことはありやせんさ。まあ、そのまゝにして置さ。今夜か明日のうちには何とか云つて来るよ。』

敬次郎は氣が氣ではないやうに、

『いや、君はさう云ふけど、僕は實に氣懸りでならんのだ。他の社會と違つて、あゝいふところのことだから、あの喜久子は一度發見された以上は何んな目に逢はされるか分らんのだ。僕も折角かうして助け出したんだからこのまゝ、又彼方へとられてしまふのはまことに残念なのだ。ほんとに何うかして行方を知る工夫はないものかなあ。』と、眉をひそめて憂慮しだす。石井はもう黙つてゐた。そしてしばらくすると、手を拍つて敬次郎と自分の飯の支度を命じて、大きな伸びをしながら、

『あ、ツ、俺やどうしてかう腹が空くんだらう、胃袋がどうかしとるんぢやないかしら。』と、

呑氣なことを云つて、笑つてゐる。

やがて煮魚か何かの貧しい菜で飯が來ると敬次郎も仕方がなしに箸をとるにはとつたが、しかし味などは小しも分らなかつた。眼の前には絶えず喜久子の姿が髣髴して、ゐても立つても耐らないやうな氣がして來る。彼は僅か二杯で茶にしてしまつた。

飯がすむと、石井は机の方を向いて知らん顔で何やら参考書らしいものを引出して讀み初めたので、敬次郎ももう取付き場がなくなつて隅の方へいつてごろり横になつてしまつた。考へれば考へるほど不安と憂慮は募つて來る。このまゝ、かうして置いてもしあの喜久子が死ぬやうな目にでも逢はされてゐるとしたら何うしよう。いつぞや話に聞いた不具になつた女のことなどを思ふと、到底じつとしてはゐられなくなつて來た。

敬次郎はやがてむつくり起き上つて、

『ねえ、石井君、僕一寸湯島の例の小母さんのところまで行つてくる。』と、云ひ捨て、そのまゝ、そゝくさと出ていつてしまつた。



敬次郎は電車に乗るだけのこともないので、それから足に任せて本郷通を真直に突切つて、大學病院の横手から湯島の天神下へ出た。一度来たばかりではあるが道筋もよく覚えてゐるので、彼は間もなく佐竹の標札の出た路次口へ辿り着いた。

ひよつとして喜久子がそこへ連れられて來てゐるかも知れないので、敬次郎はしばしの間門口のところにとつそり立つて家のなかの様子を窺つてゐた。

家には誰れも人氣がないやうにひつそりと静まり返つてゐる。上り端のすぐ奥の茶の間には薄暗い電燈がついてゐて、その光が煤けた障子にぼんやり映つてゐる。二階も何處もかも雨戸が閉めてあつて、軒先に乾した洗濯物がふらくくと風に揺らめいてゐるばかりであつた。敬次郎は何となく氣臆れがして初めのうちは何うしても家へ入れなかつたが、併しいつまでさうやつてゐる譯にもいかないので、やがて思ひ切つて格子戸を開けてみた。格子につけた

鈴が消魂しく鳴ると、やがて奥からは聞き覚えのある老爺の聲が、

『誰だな、お常か?』といふ。

敬次郎はごくりと唾を呑み込みながら、

『御免下さい。僕は安井といふものですが、こちらに喜久さんは來とらんでせうか。』とおづおづいふ。

と、やがて上櫃の障子の面には大人道のやうな黒影がぬうツと立ち塞がつて、いきなり障子をがらりと引開ける。そこから顔を出したのは丸々と襦袢を着込んだ佐竹の主人だつた。彼は鼻の先へすり下つた眼鏡をうへ、押し上げながら人の好き、うな笑ひ顔になつて、

『おう、若旦那でございましたか。こりやどうも失禮を。さあ、穢いところで御座いますけど、どうかお上りなすつて。』と、云つて、黄絹の座蒲團を持つて來て、長火鉢の前へ敷く。敬次郎は遠慮がましくもぢもぢしてゐるが、主人の顔をみるとつい引入れられて、そのまま家のなかへ上つた。



そこは六疊で、商買もの、荷箆筒や、帳場机などがそれでもきらんと壁際に置いてある。柱には古風な仕入帳や大福帳がか、つてゐて、そのうへの縁喜棚には小さなお燈明がゆらゆら揺めいてゐた。穢らしい家の割には呉服ものを扱ふ店なので丹念にそこいらが取片付けてあつた。

主人はここにこしながら、

『私は佐竹でございます。お初にお眼にかゝります。』と、叮嚀に初対面の挨拶をして、『いや、もうどうぞお平になすつて下さいまし。若旦那のことは昨晚お霜さんからすつかり伺つて、實は私共まで何とお禮を申上げてよいやら、ほんとお禮の言葉もないつて申し暮らして居りましたんでござんすよ。また昨晚はお霜さんがあんなに遅くお邪魔に出て、ひと晩御厄介になりましたさうで、まことにどうも有難うございます。』と、煙管を取り上げながら商人らしい口振りで頻りに禮を云ふ。

敬次郎はそれに挨拶を返してゐるが、存外氣の置けない主人の様子にすつかり安心して、

やがて喜久子のことを云ひ出した。と、主人はこくりと合點いて、

『いや、實はそのことで、私も今日は一日痛めつけられましたんで御座んすよ。』と、いつて、彼は煙草の煙を吸つては吐き出しながら氣忙はしさうに事の次第を語り出した。

今日の午後、案の定昨夜も喜久子から聞いた例の淺草の元締めといふのから今度はひどく質のよくない遊人を差向けて來たのだといふ。そして佐竹の玄關で散々じぶくつてしまひには凄味な威嚇文句などを並べてもし喜久子を出さなけりやその分ちや差置かねえからなぞいふので、佐竹夫婦もほとほと持て餘してしまつたのであつた。

## 六十八

氣の弱い佐竹夫婦はその威嚇に憎えて、何とかしようとは思つても、昨夜あれからの喜久子の行方がさつぱり分らないので、何うにもすることは出来なかつた。で、もうほとほと困つてゐるとそこへ突然始終電話の取次ぎをして貰ふ先隣りの藝者屋へ電話がか、つて來た。



誰れからかと思つて小母のお常が出てみるとそれは思ひもかけない喜久子からたつた。小母は電話口でいざこざ云ふ譯にもいかないので、唯今對芳館にゐるといふことだけを聞いてそのまゝ、電話をきつてしまつたのであつた。

さあ居處を聞いてみるともう小母はいかに我慢をしようと思つてもどうしても包んで置けなかつた。それに元締めの方から來た男は嵩にか、つて、しまひには刃物でも見せさうな氣勢を示して來たので、小母は到頭隠しきれなくなつて、對芳館の名を洩らしてしまつた。

遊び人はそれを聞くと猶ほいきりたつて、もしそこへ行つてゐなかつた時にはどんな目に逢はせるか分らねえぞと云つて、さんざ威嚇したあとで、人質同様に小母を引張り出して出ていつたきり、どうなつたものやら今に歸つて來ないのだといふ。主人はもうおろおろして、今首を長くしてお常の歸りを待ちあぐねてゐるところなのであつた。

敬次郎もそれを聞くと一々思ひ當る節があるので、此方の方の話もすつかりして聞かせた。自分達の留守の間にかうかういふ男と女が來て、喜久子を連れ出していつたといふことを話

すと、主人は大きく合點いて、

『ふむ、ぢや兎に角家のお常はお霜さんに遭つたにや遭つたんでござんすなあ。さうとするといよいよ怪しい。一體こんな遅くなるまで何處へいつてゐるんでござんせうなあ。二人とも淺草の元締めのところへでも連れていかれて、酷い目にでも逢はされて居るんぢやござんすまいか。』と、ひどく心配さうな顔になる。

敬次郎もまるで當てがつかないので、何うして、か分らなかつた。相手がさうした向ふ見すな悪黨だとすると、お常と喜久子の安危は彼にもひどく氣遣はれるのであつた。

彼は遠くを見るやうな眼眸をしながら、

『それにしてもまさか無法な真似もしまいか、何を云つても相手が相手ですからなあ。……』と、心細さうにいふ。

主人はごくりと合點いて、

『ほんとにさうでござんすとも。何を云つたつて、淺草の奥山をごろついでゐる遊人でござ



んすもの、場合に依つちやどんな思ひ切つた無法な真似をしないとも限りませんからなあ。私やそれが氣懸りでならないんでござんすよ。』

二人はさうして顔を突き合はせたま、思案に暮れてしまつた。柱時計をみるともう八時である。喜久子が對芳館を出ていつてから少くとも四時間の餘経過してゐるのである。もし唯喜久子の體が欲しいものなら、お常だけでも歸して寄越しさうなものである。それをしないところをみるときつと何か事が起つてゐるに違ひない。

敬次郎は喜久子から聞いた一座のことなども主人に話して聞かせた。逃亡を企だて、不具にされてしまつた娘の語などもすつかり聞かせた。と、主人はひどく感じ入つて、

『ほんとにあゝいふ社會でござんすからそんな恐い事も始終あるんでござんせうなあ。私なんざ氣が小さうござんすから、そんなお話を伺つたゞけでも生命が縮まるやうでござんすよ。あのお箱さんも若い身空でよくそんな荒つばい稼業がしてゐられるもんでござんすなあ。どうかして身抜きが出来るものならさせてやり度いが……それにしても一體何處へいつちまつたんでござんせうなあ。ほんとに私やどうしたらいい、だらう。』

六十九

敬次郎も主人も何處へといつて捜しにいく當てもないので、そのま、仕方がなしにいろんなことを話しながら小母のお常が歸つて來るのを當てもなく待つてゐた。主人は喜久子の亡つた母親の話などをしだして、實に感心な女だつたといつて頻りに昔を思ひ出してゐた。

お常と喜久子の母親とはもと同じ髪結ひのところへいつてゐたので、そこで知合ひになつたのであつた。その時分はこの佐竹自身もまだやつぱり本所の小さな呉服屋の通番頭をしてゐて、何かと手不足な生活をしてゐた。

お常と喜久子の母親のお時とは妙に性が合ふとでもいふものか、それから殆んど十數年の間變りなく交際つてゐたのであつた。喜久子の父親が失踪してしまつてからは何や彼と力になつてやつて、まるで姉妹のやうに近しくしてゐた。



お時は氣丈な女なので、淺草の子供芝居で仲賣りなどをしてゐても、たつたひとり立派にやつていつた。唯どうかしてあの喜久子に身抜きをさせてやつて、堅氣な婿でもとつて親子一緒に暮らしていきたくいと常に口癖のやうにいつてゐた。そして本願寺裏の細路次のなかにある六軒長屋で死んでゆく時にもお時はくれぐれも喜久子の後事をお常に頼んでいつたのであつた。

そんな話をしてゐるうちにいつの間にかもう十時を打つてしまつた。敬次郎はあんまり遅くなるので歸らうとは思つても、何んだか氣懸りになつて何うしても起てない。主人はひどく心細がつて、

『ほんとに、若旦那、どうしたものでござんせうなあ。今迄歸つて来ないところをみるときつと何事かあつたに違ひない。』と、云つて、考へ込んでしまふ。

敬次郎も思案に餘つて、黙つてゐるより他はなかつた。

十時半過ぎて少し経つと、ふつと路次口の方では冴えた下駄の音が夜寒の底から湧き上る

やうに聞えてきた。この路次内では藝者屋が一番人の出入が激しいので、又箱屋が廻つて来たのだらうと思つてゐると、その足音はそ、くさと小早くなつて、いきなり佐竹の格子先へ来てはたと止る。それと一緒に格子戸が消魂しく開いて、それが閉つたかと思ふと障子口のところからついと顔を出したのはお常であつた。

主人は驚喜したやうに顔を上げて

『おう、お常か。お前一體どうしたんだな。』と、浴びせかけるやうに聞く。

お常は一寸そつちへ眼で挨拶して敬次郎がゐるのでいきなりそこへびたりと坐りながら、『まあ、若旦那。私唯今一寸お宿へお伺ひしたんでござんすよ。さうしたらお友達の方がきつと貴女のところへいつてゐるだらうからと仰つたもんですから、大急ぎで歸つて参りましたの。』と、云つて、彼女はひどく息を弾ませてゐる。

敬次郎も眼をうるませて、

『さうでしたか。』と、いつたが、もう我慢が出来なくなつたやうに、坐り直しながら『それ



で、喜久子さんはどうしました？」と、訊く。

お常は生唾を呑み込みながら、

『まあ、若旦那、ほんとに何うしたもかうしたもないんでござんすよ。今詳しくお話しをいたしますけど、ほんとに飛んでもないことになつちまつて。……』と、俄かにおろおろする。

主人も息をつめて、

『おい、お常。俺は今迄もどうしようかと思つてゐたんだ。若旦那もひどく御心配だから何はともあれ早く話して呉れ。』と、いつて迫きたてる。

お常はコートをぬいで、長火鉢の方へ居坐り寄つて来た。

## 七十

お常の語るところに依ると、喜久子は心配してゐたとほり到頭淺草の元締の方へ引取られ

てしまつたのであつた。主人と二人で想像してゐたやうに、お常はもう萬事休して、兎にも角にも本郷の對芳館へいつて、敬次郎にも逢つたうへ何かと相談をしてみようと思つた。敬次郎と喜久子と四人で話せば又敬次郎の方にも何かい、思案もあらうし、或は何とかうまく穩かな話になるかも知れないと、お常もそれを頼みに敬次郎の下宿へ訪ねていつたのであつた。

と、生憎敬次郎は不在である。それならばかうかういふ娘が來てゐるだらうといふと、喜久子は小母がひとり訪ねて來たものと思つて、いそいそしながら二階から降りて來た。その顔をみると遊人はもう何を云つても離す道理がなかつた。彼はこれからすぐに淺草の元締のところへ來いといつて、まるで引摺だすやうにして喜久子を戸外へ連れだした。喜久子もう間もなく若旦那が歸つて被來るから、どうかそれまで待つて呉れ、もうかうなつたうへは皆さんへ御迷惑をかけるのもお氣の毒だから、自分で所置をつけやうし、素直に元締のところへも行かう、でもそれにしても若旦那にはあれほど御恩にもなつたし、



御厄介もかけたのであるから、唯ひと言でもお禮を申上げてお別れがしたいと云つて、喜久子は泣いて頼んだけれども遊人は頑として聞き入れなかつた。で、詮方なく喜久子は男のいふがまゝに戸外へ出たのであつた。

本郷の三丁目までやつて來ると遊人はいきなりお常に向つて、もうお前には用がないから歸れと云ひ出した。お常もそんな風の悪い男と一緒にいつまでも歩いてゐるのは恐いので、それをい、しほに別れて歸り度かつたが、併し喜久子のことを思ふと氣懸りで歸れないので、兎に角話のつくところまで一緒にいかうといつて隨いていつたが、電車に乗らうとする時に遊人は態と過誤のやうな風をして、昇降段に足をかけてゐるお常をぼんと車外へ突落した。お常は幸ひ轉びも何もしなかつたが、その際に電車は出てしまつた。人込みのなかなので、まさか大聲をあけて呼びとめる譯にもいかず、彼女はそれなり夢中でその次の電車に乗つたのであつた。

その電車は方向が違つてゐるので乗り換への時に到頭お常は前の電車に乗つた遊人と喜久

子の姿を見失つてしまつた。お常はもう何うすることも出来なくなつてしまつた。考へれば考へるほど氣にかゝるのは喜久子の身のうへである。それを思ふとこのまゝ喜久子を放棄らかして歸つてしまふに忍びなくなつて、お常はいろいろ思案した末、やつと一策を案じ出した。

まだ喜久子の母親のお時が生きてゐた時分に、よく六軒長屋で逢つた活動小屋の樂屋番の親爺がゐるのでそれに聞いてみようと思つた。その親爺はもう二十年も淺草の見世物小屋を渡り歩いて飯をくつてゐる男なので、淺草のことなら手にとるやうに知つてゐた。で、その男に訊いたら元締の方のことも分らうし、また何かの手蔓で喜久子のことも分るだらうと思つたのであつた。

お常はさう思ふと、直さま又電車に乗つて淺草へいつてみた。幸ひその親爺は相變らず世界館の樂屋口にゐたので、お常はそれを戸外へ呼び出して、すつかり事情を打明けて話してみた。



と、その親爺はにやにや笑つて、『いや、お常さん、あの江川喜久子なら私もよく知つてゐますよ。あれが信州へいつてゐるたんですかい。道理で此節看板がみえねえと思つた。あの母親にや私も随分厄介になりましたからなあ。』と、云つて一寸眉をあげてみせる。

七十一

樂屋番の親爺の口占をひいてみると、元締といふのは並大抵な悪辣な奴ではないらしかつた。つまり喜久子を育てた江川一座の親方から兎にかくその元締のところへ金で賣られてゐるやうな形になつてゐるので、今のところ喜久子が契約を破つて逃亡して來たとすると、もうその元締の存分になるより外はなく、あの男のことであるから一度捕へた以上は端への見せしめに随分酷い目にも逢はせるだらうと云つた。それには以前の師匠などは一切口を入れる権利がなくなつてゐるのであつた。

それを聞くとお常の心配は猶ほ一層募つてゆくのであつた。お常は何うかしてあの喜久子

の身抜きをしてやる工風はなからうかと云つてそれを相談してみたが、親爺は首を振つて、『いや、そんなことはとても出来る譯のものぢやないよ。そんな遊人なんか差向けて寄越すくらゐなもの、今度はあの喜久子が裸にされちまふ番さ。それにあの子はまだ年は若いし、顔は綺麗だし、それに藝もうまいし三拍子揃つてゐるんだもの、元締の方ぢや金になる盛りだあね。何んでそんなない、玉を手離すもんか可哀さうだがあの喜久子は遁けたりなんかしたのが却つて身の枷になつて、これから骨と皮になるまで牛馬のやうにこき使はれるのさ。あの社會にゐる奴はまるで人鬼だからね。』

お常はさんざそんなことを云はれてもう心の底から憎えてしまつたのであつた。あの喜久子はとんだことから到頭自分で火のなかへ飛び込んでいつたやうなものである。こんなことならたとへ殺ろされても對芳館なぞへいくんぢやなかつたと悔んでももうあとの祭であつた。お常はもう策盡きて、それでは兎に角何か手蔓があるならどうか喜久子の動靜を搜つてみて呉れ、そのうへで又何んとかひと思案してみるからと云つて、彼女は哀願するやうに親爺



に頼んだ。と、親爺は眞顔になつて、

『そりや手蔓はいくらでもあるから様子は分るかも知れないが、併しお前さんのやうな素人がうっかり手を出して酷い目に逢はされでもすりやい、面の皮だから、こりや餘り深く立入らねえ方がい、と思ふよ。なまじなことをして卷添へでも食つたらほんとに法返しがつかないから、喜久子のこととはもう何も當人の不運と諦めて、お前さんはこのまゝにして放置つていたらどうだね。』と、親切らしく云つてくれた。

お常はそれでも思ひ切れないので様子を探ることを呉れぐれも頼んでそのまゝ、親爺に別れた。

たつたひとりになるとお常は心細くて仕様がなかつた。家でもさぞ心配してゐるだらうとは思つても、何うしてもそのまゝでは歸れなかつた。で、何を置いても先づ敬次郎のところへいつてゆつくり前後の話をして相談しようと思つて、お常はその足で又もう一度對芳館へいつてみた。と、敬次郎は留守で、石井が出て来て、きつと貴女のところへいつてゐるだらう

といつたので、お常は今度は腹をきめてやつと家へ歸つて來たのであつた。

その話を聞くと、主人も敬次郎も何となく落膽してしまつた。敬次郎はもう耐らなくなつて、自分ひとりでもその元締のところへ踏込んでいつて、喜久子を救ひ出して來度いやうな氣もしたが、併しそんなことは到底出來ないのであつた。淺草は見す知らずの他郷人にとつては一種の魔窟にも等しいところである。敬次郎は唯首を垂れて嘆息を吐くより他はなかつた。

その晩は何うしようといふ方針も定まらないので、敬次郎は十一時半になると到頭すべしと歸支度をして佐竹の家を出た。

## 七十二

それから二日ばかりの間はもしや佐竹の方から何とか便りがありやしまいかと思つて敬次郎は夜もおちおち眠られないやうであつた。二日目の晩には愈我慢が出來なくなつて彼は又



佐竹へ訪ねていつたが、丁度その時には主人はゐなくて、お常がたつたひとりでしよんぼり留守居をしてゐた。

お常に聞いてみると、彼等も樂屋番の親爺からの便りを待つてゐるが、何とも音沙汰がないので、今日又もう一度訪ねていつてみると、親爺はその後いろいろに手を廻はしてみたがさつぱり様子が知れないといつたといふ。で、主人もひどく氣を焦つて、もし何んなら懇意な刑事巡査があるので、それにでも頼んでしまはふかと今相談最中だと云つた。

敬次郎もいよいよ分らなければさうでもするより他はないと思つた。刑事に頼めば無論警察沙汰になつて来る、寧ろこの場合さういふ強壓的な手段を執つてしまふのもい、かと思つた。

敬次郎はそのまま、お常に別れてぶらぶら足に任せて廣小路の方へ出ていつた。頭がくさくさして耐らないので、どうせのことに一時間ばかりそこいらを散歩して歩かうかと思つたがそのうちに彼は自分でも夢中で淺草行の電車へ乗つてしまつてゐた。

淺草へ来てみると仲店から池の端は眞黒な人込みで、身動きもならないやうな混雑であつた。物靜かな田舎町から出て來た敬次郎はかうも人間があるものかと恐ろしいやうな氣がして、しばらくの間ぼんやり池の端に佇んで押返すやうな群集の流れをみてゐた。

樂屋番の親爺がゐるのはたしか世界館と聞いてゐるので、彼は何をしようといふ氣もなく唯その人の顔だけでもみたいやうな氣になつてその活動小屋の裏へ廻つてみた。細路次になつたはじめめた裏口の向ふには薄暗い樂屋口が見えるにはみえてゐるが、しかしそこには誰の人影もなくて、小さな木製の腰かけのうへには大きな貧乏徳利が一本のせてあるきりだつた。

敬次郎はぐるりと廻つて、我れにもなく江川の球乗りの前へ出たが、何んだかひどく中へ入つてみたいやうな氣がするので、そのまゝ、つかつかと木戸口へ入つていつた。

なかは割れ返るやうな大入りで、脊丈の高い敬次郎も伸び上つてみなければ舞臺が見えないやうな有様であつた。彼は舞臺へ上る幾人となない若い曲藝の娘の顔を狂ほしいやうな眼眸



で凝視してゐるが、併しそのなかには喜久子に似た女はひとりもゐなかつた。無論彼とてもこのなかに喜久子が出てゐるようなど、は夢にも思はなかつたが、それでも何かしら寂しいやうな氣がするのであつた。

敬次郎の眼には松本の八幡宮の秋祭の賑はひが髣髴として見えて来る。天幕張の懸小屋がみえてくる、喜久子の面影がさながら昨日別れた人のやうにはつきりと思ひ出されてくる、むつちりとした肌を喰ひ入るやうな肉襦袢を着て、高い高い鞆のうへで曲藝を演じてゐるその姿、彼はそれを思ふと惱ましき、逢ひ度さに思はず涙ぐんでしまつた。

球乗りの小屋を出ると、彼は池の向岸へいつて、とある捨石のうへ、腰を下ろして、輝やかなしい燈火の波に彩られた歡樂の幻影のやうな活動小屋の光景を眺めた。明るい灯の殘映は空を染めて、樂隊の囃しや群衆の喚く聲がその賑ひの脈膊のやうに聞えて来る。毒々しい色で描いた繪看板や彩旗なども此方から見る不思議な姿に見えた。

敬次郎はその時大都會の底を眺めてゐるやうな不安と恐怖を覺えた。あの燈影の彼方にあるの憐れな喜久子は隠されてゐるのである。何といふ恐ろしい惡魔の城廓であらう。彼の眼にはその刹那賑はしい夜の歡樂境がさながら火焰地獄の光景のやうにももの凄じく映つて來るのであつた。

### 七十三

その翌日になるとさすがに石井もあんまり敬次郎がうわうわして歩いてゐるので、大學から歸つて來ると眞面目になつて忠告した。柳田先生の方もあのまゝになつてゐるので、何よりもそれが氣懸りだといつた。若しそんなに喜久子のことにはばかりかまけてゐて、先生の家へ行く氣がないのなら、僕も依頼者の位置として誠意のないものを強めて先生に願ひする譯にもいかんから、此れから僕自身で出向いて、斷つて來ようかとまで云つた。

敬次郎はそれを云はれるとさすがに顔を眞紅にして、一言の返事も出來ないのであつた。理性が眼覺めて來ると、耐らないほど激しい悔恨も感じるのだが、併し又喜久子のことを思



ふと何うしても愛着の思ひが斷ち得ないのであつた。境遇はさうなつてゆくし、行方がまるで分らなくなつたとなるとその焦だ、しさ、もどかしさだけでも敬次郎は頭腦が麻のやうに混亂して來るのであつた。

石井は眞面に敬次郎の顔を見詰めながら、頻りに反省を促した。君は今そんな馬鹿なことに現をぬかしてゐられる境遇ぢやあるまいといつた。そして學校の方の復校の手續もそのままになつてゐるのを彼はひどく責めた。

敬次郎はその言葉でひどく發奮して、その日すぐに荷物をまとめて柳田先生の家へ引移つていつたのであつた。柳田先生も此間から何うなつてゐるのかと思つて心配してゐたといつて、敬次郎の顔を見ると怪訝さうに笑つてみせた。彼は玄關のすぐ傍の六疊ばかりの室をあてがはれてその日は夕方までか、つて荷物の整理などをした。もうひとりの書生といふのはその前々日に暇を貰つて郷里の方へ歸つてしまつたのであつた。

荷物がすつかり形づくると敬次郎は矢も楯も耐らなくなつて、一寸石井のところまでいつて

來るからと嘘を吐いて、又本郷の佐竹へ訪ねていつた。

その晩は折よく、主人もお常も家にゐて、敬次郎の顔を見ると二人とも玄關先へ駆け出して來ながら、お常は夢中で、

『若旦那、あのお霜さんの様子がやつと分りましたよ。さあ、まあ、お上りなすつて。』と、云つて、手を執らんばかりにして長火鉢のところへ連れてゆく。

敬次郎もそれを聞くとほつとして、先づ長火鉢の向ふへぐつたりと坐つた。

お常の話をきくとその日も佐竹の主人は樂屋番の親爺のところへ訪ねにいつたのであつた。と、その前の晩小屋がはねてから親爺はもとから親しくしてゐる江川一座の道具師のところへいつてそれとなく様子を尋ねてみると、喜久子のその後の動靜は案外手もなく分つたのであつた。その道具師といふのは一座の懸合ひでよく元締めのところへも出入りするもので、それから二日ばかり前の日にいつものやうに元締めの家へいつてみると、そこで彼はひよつくり喜久子に逢つたのであつた。丁度彼がいつた時は大論判の最中で、喜久子は打たれたり、



擲られたりして頻りに泣いてゐたといふ。そして何んでも信州の方はそのまま、金で手を切ることにして、その代りに喜久子の體は又東北の方を廻つてゐる別の一座へ賣られることになつたといつてゐたといふ。

お常は涙ぐんで、

『ほんとに私それ聞いてお霜さんが可哀さうでならないんでございますよ。その時の話に明日先方の番頭に引渡すといつてゐたさうですから、もう今頃はその一座へ無理に連れていかれて、何處か又遠い處へ行つてしまつてゐるに相違ないと思ひます。それに給金なんかも今度の分から信州の残りを差引いて残つただけのお金はきつとその元締めの懐へ入つてしまつたんでせうし、ほんとにお霜さんぐらゐる可哀な人はありませんわねえ。今も家の人とそれを話して私泣いてゐましたんでございますよ。』

七十四

樂屋番の親爺はもう喜久子が別な一座へ賣られていつた以上は素人がいかに手を廻したとて無駄だから、黙つて成行きに任せて置くより他はあるまいと云つた。お常はどうかしてその一座の名だけでも知り度いといつたが、もうそれさへ分らないのであつた。

敬次郎はその話を聞くと何ともいへない絶望を覺えた。折角自分の手に入つたものを、又見も知らぬ國へ悲しいさすらひの旅に出なければならぬやうに餘儀なくさせてしまつたのかと思ふと、我れとわが胸を掻きむしり度いほど焦だ、しかつた。もう又二度と再び逢ふ瀬はないのであらうかと思ふと、敬次郎の胸には涙が一杯に込み上げてきた。

敬次郎は何うにも仕様がなないので仕方がなしにそのまゝ、佐竹の家を辭した。お常は門口まで送つて出て来て、かうなつてしまつたうへはもう唯喜久子からの便りを待つばかりである。もし何方かへ消息があつたら早速報らせ合はふと固い約束をした。敬次郎も柳田先生のとこ



ろへ引移つたことを話して、その番地なども書いて残していつた。

敬次郎はその晩どうしても眠れなかつた。東北とだけでその國里の名さへ知れぬ喜久子の行方が氣になつて、いくら眠らうと思つても、眼は益々冴えてゆくばかりであつた。彼の眼の前には、暗い夜の闇のなかに不思議な未見の町が現はれて来る。天幕張りの貧しい懸小屋が現はれてくる。そのなかで数にも足らぬ観客を前に置いて、あの喜久子が肉襦袢一枚の姿で手に汗を握らせるやうな曲藝を演じてゐる。ふらふらと心細けにゆらめくアセチリン燈の光に照らされたその顔を見ると、彼女は眼を眞紅に泣膨らしてゐる。そんな幻影をじつと見詰めてゐるうちに、敬次郎の頬には熱い涙が云ひ甲斐もなく、ほろほろと流れ落ちて来るのであつた。

その翌日彼は悩み溢る心に答つて柳田先生に保證人に立つて貰ふことにして、午後から早稻田大學へいつてみた。以前から自分を愛して呉れてゐる松倉といふ教授に逢つて復校のことを頼むと、教授はもう一も二もなく賛成してくれた。早速自分で事務所へいつて、いろいろ

ろな手續を指圖してくれたので、もうその日のうちに再び敬次郎は早稻田の學生にかへることが出来たのであつた。

彼は石井が心配して呉れるのがひどく氣になるので、早稻田から歸りにすつと石井の下宿へ廻ることにした。校門を出て鶴巻町の通りを眞直に歩いていきながら大學の方を振顧つてみると、さすがに敬次郎の胸にも母校に對する懐しさが油然而として湧いて来るのであつた。一年前の活々とした學生生活も思ひ返されてくる。校舎の高い麓をみても、大通りにづいぐみても、角帽を被つて往來してゐる學生達の姿をみても何ひとつとして思ひ出の種ならぬはない。敬次郎はさすがに久振りで自分に歸つたやうな自恃の念を覺えたのであつた。石井の下宿へ来てみると、彼は紅々と射す夕陽の窓で一糸懸命になつて字の細い洋書を讀んでゐた。敬次郎は此間からの禮を云つて、何よりも先に復校の出来たことを話して、學生證などを取出して石井に見せたりした。

石井は磊落に笑つて、



『ちや愈明日から又學校通ひだな。それがい、俺やそれでやつと安心したよ。此間うちのやうぢや全く安井敬次郎一文の價値もないからな、は、は、は、』と、云つて、火鉢の火をせ、りながら、『お、安井。時に今朝君に宛て、手紙が來とつたぞ。さあ、俺は何處へ藏つたかしらん。』と、云つて、いきなり机の抽出しを開けてなかを掻き搜つてゐたが、やがて、『おう、あつた、あつた。』と、云つて大型の封筒に入つた一通の手紙を取出して、ぼんと敬次郎の眼の前へ投げだした。

### 七十五

ふつとその手紙をみると敬次郎は胸が張り裂けんばかりに時めいて來た。もう手紙と聞いたいけでも彼はどきつとするので、彼は云ひ甲斐もなく指先をふるふるはしながらそれを取上げてみた。裏を打返してみると、案に相違してそれは喜久子から來たのではなく、筆太な字で安井宗左衛門としてある。敬次郎はひどく失望すると同時に、又もう一度胸を躍ら

したのであつた。

敬次郎は、

『何んだ、親爺からか。』と、呟いてそれでも石井のみる前を繕ひながら封を切つてみた。なか、らは父がよく使ふ罫をひいた田舎臭い巻紙が出て來て、それには酔つたやうな手蹟でかう書いてあつた。

「前略 過日來種々申すにも不拘、突然無斷家出をなし、加ふるに親の金子を盗み、女と手を携へて奔るに至つては言語道斷の所業と存じ、向後其許とは一切關係を絶ち、親子の縁も今日限りと思諦め 申候 間左様御承知相成度候。孰れ近日中廢嫡の手續も相濟ませ可申、親族一統協議の上充分制裁を相加へ可申候間、其際になりて父を恨み申間敷やう 旁云 添申候。先は右まで 宗左衛門」

としてある。

敬次郎はそれを見ると覺悟は極めてるながらも妙に裏悲しくなつて來た。自分が無斷で家



出をしたり、金を持ち出したりしたのは悪事には相違ないが、併しその事譚を語つたら世間の人は誰しも自分に同情して呉れるであらう。父は日夜酒色に耽溺しながら自分が學校へ入らうといふのにそれを許しても呉れないのである。世の中にこんな不條理なことがあらうか。それを思ふと敬次郎はひどく反抗的な氣持ちになつて、廢嫡されるなぞと云ふことは何んでもなく思へて來た。

石井は心配して、ぼんやりしてゐる敬次郎の顔を横合から見ながら、

『おい、安井。お父さんから何と云つて來たのだ？、さぞ怒つてゐられるんだらうなあ。』といふ。

敬次郎は黙つて、父の手紙を見ろといふやうに展けたまゝ、石井の方へ突き出した。石井はそれを受取つて讀んでゐるが、やがて、

『ほう、廢嫡するか。つまり君は勘當を食はされた譯になるんだね。こりや愉快だ。は、は、』と、無遠慮に笑つて、『そりやい、が、このなかに女と手を携へて云々とあるのは何うし

た譯だ。君はそんなことをやつたんか。』

敬次郎は苦笑ひをして、

『いや、そりやきつとあの喜久子のことだらうと思ふのさ。それにしても、喜久子は諏訪から乗つたんだのに、どうしてそんなことが親爺に分つたらう。それが不思議でならんのだ。』

石井も小首を傾けて、

『ふむ。そりや可笑しいなあ。まさか後をつけて來たものがあるんぢやあるまいし、どういふんだらう。それとも君が知らん間に汽車のなか、或は停車場でも誰か知つた人間にでも出遇はしたんかな。』

『いや、そんなことは斷じてないさ。僕等は随分細心な注意を拂つて來たんだもの。實に不思議だよ。』

石井は幾度考へても想像がつかないやうな顔をしてゐるが、やがて

『それはまあい、として、兎に角勘當とは面白いな。あのお父さんが思ひ切つて君と親子の







の顔を見詰めながら、『それにつけても氣を注げなけりやならんのは他から来る誘惑だ。ほん  
とに此間のやうにそわそわしてゐられちや俺も全く閉口するからな。どうか安井、貴様今云つ  
たことを膽に銘じて忘れずにくれよ。そうして決して誘惑なんか負けて呉れるなよ。  
お互に我々の前途にはいろんな艱難が横はつてゐる、向上の一路は高くて険しい。餘程意志  
の強固な、志操の堅實なものでなけりや到底目的の彼岸に到達することは難かしい。俺と貴  
様とは行く道は違ふが、併しお互にこれから大いに發奮して勉強しようぢやないか。俺は貴  
様には負けんぞ。又貴様も決して俺に負けるな。は、は、全く俺達は今が一番元氣のいい時  
だ。これ、この通り俺の胸には燃えるやうな血がどくどくと脈を打つてゐる。實に愉快ぢや  
ないか。』と、云つて、彼は意氣昂然と胸を叩いてみせる。

敬次郎もその時には心の底から若々しい興奮と、活氣とを覺えたのであつた。

石井はそれから頻りに眉を上げて元氣のいいことばかり云つてゐるが、さすがに喜久子  
の事に就いては一言も云はなかつた。彼はやがて又小兒らしい無邪氣な顔になつて、

『おい、安井。時に貴様は金を少し持つとらんか。』といふ。

敬次郎は怪訝な顔で持つてゐると答へると、石井はにやりと笑つて、

『いや、それなら俺に五十錢ばかり呉れ。何んだか今夜は馬鹿に酒が呑み度くなつたから一  
杯やらうぢやないか。その代り酒は階下へ命じて御馳走するぞ。』

敬次郎も笑ひ出して、それならいつそのことにそこのカッフェか牛屋へでも行かうと  
いふと、石井は手を振つて、

『貴様はすぐさういふ贅澤なことを云ひだすから駄目だ。貴様の五十錢で肴を買つて來させ  
て此處でやるのが一番い。俺は今日實は風呂錢もないんで、もう財源枯渴だ。は、は、は、  
』と、腹を揺つて笑ひながら階下から下女を呼んで酒の支度を命じ、敬次郎から五十錢玉  
をひとつ出させて、それで肴を買つて來いといふ。

やがて下女が鯛の焼いたのと刺身を肴に酒の支度をして持つて來ると、二人はそれを互ひ  
の手酌で飲みながら元氣のいい調子で將來の希望などを語りだした。二人は談論風發と云ふ



風になつていつた。

七十七

思はず酒を過ぎして、敬次郎がふつと時間に氣づいて歸り仕度をしだしたのは、もう八時過ぎであつた。他人の家へ食客をしてゐる身がと思ふと、さすがに敬次郎は氣が咎めてならなかつた。又いづれ近日中にやつて来るからと云つて、彼はそのまま、石井に別れを告げて戸外へ出た。戸外へ出るとしんとした往來にはもう霜が降りてゐるやうな氣勢がして四邊は凄

いほど明るい月夜になつてゐた。敬次郎は蒼ざめた月光に照らされながら大急ぎで小石川の方へ歸つていつた。

やつとのことで柳田先生の家へ辿り着くと、二階の先生の書齋からは明々と電燈の光が洩れて、先生は今そこで書見でもしてゐるらしい様子であつた。敬次郎はそれを見ると酒なぞ呑んで來たのがひどく濟まないやうな氣になつて、おづおづ玄關の扉を開けてなかへ入つた。

そして自分の部屋で少時の間息を入れて、やがてさあらぬ顔で二階へ挨拶に上つていつた。先生は丁度その時瓦斯ストーヴの前へ腕椅子を持つていつて、長々と足を踏みのぼしながら頻りに讀書をしてゐた。敬次郎が入つてゆくと此方へついと顔を振向けて、鼻眼鏡越しに彼の顔をみながら、

『お、安井か。大變遅かつたぢやないか。』といふ。

敬次郎はひどく恐縮して、學校から歸りに石井のところへ廻つて、一緒に飯を食つたりしてゐたので遂遅くなつてしまつたといつて、頻りに詫びた。

先生は格別氣にもかけてゐないやうな顔で、笑つてゐたが、やがて椅子から起き直つて、

『それで、安井。學校の方は何うなつた。』と訊く。

敬次郎は復校の出來た次第を手短に話して、いろいろ厄介になつた禮を云ふと、先生はこくりと合點いて、

『そりやい、鹽梅だつた。何を云つても私立學校は自由でい、なあ。その代り此れから大い



にひとつ勉強せんけりや可かんど。」と、云つて、今度は急に言葉の調子を変へながら、  
『それはさうと安井。今日はお前を訪ねて客がやつて来たぞ。あれは丁度四時半頃だったか  
な。俺が大學から歸つて来て立關へ入らうとするとそこへやつて来たもんだから、俺が取  
次ぎに出たのさ。』と、云ひながらにやにや笑つてゐる。  
敬次郎は客と聞くと妙に胸騒ぎがして来たので、黙つて先生の顔を見てゐると、彼は猶ほ  
も笑ひつゝけて、

『その客といふのは此間石井が云つとつたお前の戀人といふのだらうと思ふ。まだ十七八の  
綺麗な女だったよ。俺が名前を聞たけど、どうしても恥かしがつて云はんだ。そうして又  
伺ひますといつて遁けるやうにして歸つていつたよ。』と、云ふ。

それをきくと敬次郎は思はず眞紅になつて、

『先生、御笑談を仰有つちや可けません。』と、云つて俯向いてしまふ。

『は、は、は。俺や笑談なんか云はんさ。たしかに來たんだから仕方がないさ。』と、云つて先

生はじろじろ敬次郎の方をみてゐる。

敬次郎は漸次考へてみると先生がまさか嘘を云つて自分に揶揄ふ譯もないので、今度は胸  
が底の底から感亂して來た。十七八の美しい女で自分を訪ねて來るものといつてはあの喜久  
子より他にはないのである。もし喜久子とすると何うして今頃こんな處へやつて來たのであ  
らうか。小母のお常の話が眞實であるとするとな彼女は今東北の方へいつてしまつた筈である。  
それともひよつとしたら又途中からでもそつと逃げて來たのではあるまいか。さう思ふと敬  
次郎は胸がわくわくして、大きな玉のやうなものが喉もとまで込み上げて來るやうな氣がし  
て、もうとてもじつとしてゐられなかつた。

## 七十八

敬次郎はそれから少時たつと、うわうわして足許が定まらないやうな氣がするので、先生  
に挨拶をして、自分の室の方へ降りていかうとした。先生は何か訓戒めかしいことでも云ひ



度さうな顔をしてゐたが、それでも黙つて、

『おい、安井。階下の戸締りはお前の役目だから、手落ちのないやうにやつて呉れよ。俺は今夜少し遅くまで調べものをせんけりやならんからお前もし草臥れたら遠慮なく先へ寐ていぞ。』と、云ふ。

敬次郎は恐縮して引き退つた。

階下へ降りると、彼は先生に云はれたとほり階下の各室の戸締りをすつかりした。料理番の杉谷といふ親爺はがらから硝子扉をしめる音を聞きつけると、自分の部屋からふらりと出で来て、手傳ひがてらに戸締りをする箇所を一々叮嚀に教へて呉れた。

敬次郎は自分のするだけの用をしてしまふと、自分の室へ歸つて、その机の前へがくりと腰を据ゑてしまつた。酒の酔ひは妙にこぢれて、頭がしんしんと痛んでくる。今先生から云はれた不思議な訪客のことが氣になつて、氣になつて耐らなくなつて来る。あの喜久子が旅先から又自分を慕つて遁け歸つて來たとしたら、何うしたらよからう。今度こそもう誰れ

にも祕密にして、自分ひとりであの喜久子を何處かへ隠匿つてしまはふ。さうしきさへすれば彼女の體は極めて安全に保護されるのである。故郷から持つて來た百五十圓の金が今度こそ愈々役に立つのかと思ふと、敬次郎は胸を唆られるやうな心持ちにならずにはゐられなかつた。明るい電燈の光をじつと見詰めてゐると、彼の眼には自然と熱い涙が譯もなく浮んで來るのであつた。

もう夜が更けて來たので、敬次郎はお先に御免を蒙つて寢ようかとは思つたが、考へてみれば昨日に變る食客の身である。先生がまだ起きて調べものをしてゐられるのに、先へ寢られる譯のものではない。こゝが大事な處である、先が親切にして下さるだけに、此方は飽くまで分を守つて、決して情に甘へてはならぬ。敬次郎はさう思ふと、又眼がぱつちりと冴えて來るやうな氣がした。ひとつにはまた喜久子のこと氣になつて、彼はいくら寢ようとしても眠れさうにないのであつた。

十一時を打つと間もなく何處かがかすかに門の戸が開くやうな音がした。門だけは料理番



が閉めることになつてゐるので、敬次郎はひよつとしたら料理番が戸外へでも出ていつたのではあるまいかと思つて、硝子窓のところからそつと外を覗いてみた。と、門のところには水のやうに冴え返つた寒月の光のなかに一臺の俵が停つてゐて、ぼやけたやうな紅黄い提灯の火がたゞひとつしよんぼり見えてゐる。

敬次郎はそれをみると、ふつと喜久子のことを思ひ出した。さつき訊ねて来たのに生憎留守にしたので、又態々もう一度たづねてきたのだらうと思つた。と、一緒に彼の胸は張裂けんばかりに躍つてきて、頬が燃えるやうに熱くなつて来た。

しばらくすると、彼の室の硝子窓のところにくつと黒い手がみえて、戸外からコツコツと叩く音がする。敬次郎はなるべく音のしないやうにそれを開けて、少し慄へをおびた聲で、『誰方ですか?』と、訊いてみた。

と、戸外では年を老つた俵夫が燈火のなかへ顔を出して、

『あの、柳田さんと仰有るお宅は此方ですか。』と、いふ。そして敬次郎が合點くのをみると

その俵夫はじつと彼の方をみながら、

『あの、では此方に安井さんの若旦那が被居るでせう。私はその方を尋ねて伺つたんですが、……。』と、いふ。

## 七十九

それを聞くと敬次郎は更らにそわそわして、

『その安井といふのは僕だが、何か用があるのかね?』と、云つて、四邊の様子をきよるきよる見廻したが、車夫はやつと安心したやうに、

『ちや貴方が若旦那ですか。それならあの私は下谷の君の家から参りましたんですが、俵を持つて参りましたからどうかすぐに被來つて頂き度いんです……。』と、いふ。

敬次郎は片唾を呑んで、

『なに? 僕に來て呉れつて?』と云つて、強いて氣を落付けながら、



『一體今頃何處へ行くんだね？』

『君の家まで被來つて頂き度いんです。』

『君の家？君の家といふのは何をする家だね？』

俣夫はうすく笑つて、

『若旦那。御笑談仰有つちや可けませんぜ。御存じなんでせう。池の端の君の家つて云ふ待合でござんすぜ。』

敬次郎には待合と聞くとなほ分らなかつた。あの喜久子が何うしてそんな處へいつてゐるのであらう。佐竹の家からでも迎ひに寄越すのなら分つてゐるが、そんな見も知らぬ待合なぞから俣を寄越すとは何うしたことであらう。敬次郎は怪訝な顔になつて、

『それでその君の家から誰が僕に來いつて云ふんだらう。お前はその客の名を知らないのか？』

『さあ、私や唯お帳場からさう云はれて來たんで、別にお客様の名はうかひませんでした

が……。』

敬次郎はもう猶豫してゐる場合ではないと思つた。もし喜久子とすれば一分一秒も早く逢ひ度いので、彼は矢も楯も耐らなくなつて來た。で彼はそのまゝ、身繕ひして室を出たが併しさすがに又此れから外出するといつて先生のところへ許しを受けにいくだけの勇氣はないので、彼は悪いとは知りながらそのまゝ、杉谷の部屋へいつて、一寸出てくるからどうかもう少時間を開けて置いて呉れといつて、そゝくさ下駄を突懸けて、後振顧らずに戸外へ飛び出してしまつた。そして窓の處へ突立つてゐる俣夫を手眞似で呼んで、すぐさま俣に乗せて貰つた。

振顧つてみると、先生の書齋の窓には先刻と同じ様に電燈の光があかあかと映つてゐる。それをみると、敬次郎はそこから先生が戸外を差覗きながら自分の淺猿しい行動を一々見透してゐられるやうな氣がしてならなかつた。彼は思はず顔を背けてしまつた。

俣夫はやがてそつと門扉を閉ざして、そのまゝ、梶棒をあけて本郷臺の方へ向つて眞幕に走



り出した。

大通りにはもう人の往來もばつたりと途絶えてゐた。寒月の光は蒼白く澄んで、家並の影は黒々と道の面に倒れてゐる。時々支那蕎麥の笛がかすかに遠い町を縫つてゆくのが聞えるばかり、屋敷町の夜は深沈と更けまさつてゆくのであつた。

敬次郎は途々いろんなことを考へつゞけてゐた。東京では一度も花明柳暗の巷へ足を踏み込んだことがないので、彼は何となく空怖ろしいやうな氣がする、その時になつてふつと氣付くと彼は例の百五十圓の金を入れた財布を忘れて來た。と一緒にもう一度もとへ取つて歸してどうかして財布をとつて出直さうと思つたが、併しいかに何んでもあの先生の家の門を今更ぐゆるだけの度胸はない。で、彼はひどく氣が、りになりながらも、もうなるやうになるより他に仕様がなかつた。あの金がなくてはと思ふと敬次郎は胸がうづくやうな氣がした。

ふとみると俵はいつの間にかもう明るい本郷の切通しへ來てゐた。

## 八十

君の家といふ待合は不忍の池畔に並んだ十軒のなかの可成大きな一軒であつた。町並に粹な衡門があつて、それを入つてゆくと石疊みの彼方にはの暗い釣燈籠の點つた入口がみえてゐる。篠竹には月の光がちろりと映つて、何處からか聞えて來る三味線の忍音が冬の夜更けながらに艶めかしい。

俵ががらがらと石疊みに音をたてると、やがて玄關からは若い姐さんが顔を出して、

『まあ、米さんかい。御苦勞さま。』と、いふ。

敬次郎は妙におどおどしながら黙つて玄關へ入つていつたが、姐さんはその姿をみるとにつこり愛想よく笑つて、

『被來いまし。さあ、何うぞ此方へ。』と、先へ立つて、玄關から直ぐに二階座敷へ案内してゆく。敬次郎はそのまゝ、その後についていつたが、彼の胸はもう喉元まで込み上げてゐた。



姐さんは二階廊下から又一段低くなつた中二階のひと間の前へ來るとその紙襖をそつと開けて、

『金ちやん。お待ち兼ねの若旦那が被來つたよ。』と、聲をかける。

敬次郎はその時なかにゐる人影をひと眼みると悸乎としてそこへ棒立ちになつてしまつた。粹なつくりの四疊半の真中に餉臺へ片腕突いてぐつたりとくづをれるやうに坐つてゐるのは思ひも寄らぬ松本の清香であつた。髪は銀杏返しに結つて、紫紺のやうな縮緬の羽織を引懸けて、顔にもこつてりと化粧をしてゐる。

敬次郎は口もきけないやうな驚きに打たれながら、仕方がなしに間内へ入つていつた。

と、清香はその顔を下からにつこり笑つて見上げながら、溢れ出るやうな聲で、

『若旦那。私、到頭來ましてよ。吃驚なすつたでせう。』さういふ口振りで見ると彼女はもう可成り酔つてゐるらしかつた。

敬次郎は姐さんが敷く羽二重の座蒲團へ坐つて、それでもひどく懐しい氣になりながら、

『驚いたねえ。一體何うしたといふんだい。』と息をつめて、力めて落着いた風を装ひながら云ふ。

清香はさういふうちにも餉臺のうへの盃をとつて敬次郎へさしながら、

『何うしたもないぢやありませんか。私若旦那とお約束をした通りにしたばかりですわ。いづれ詳しいお話はいたしますけど、まあそれよりも一つ上つて下さいな。この寒いのに態にお呼び立てしてほんとに濟みませんわねえ。』

敬次郎は我を忘れて酒を飲みながら、しげしげ清香の顔を見て、

『ほんとに呆れたねえ。僕はまさか君が來たんぢやあるまいと思つた。』

『ほ、、、。そんなに呆れなくなつてい、ぢやありませんの。あの若旦那の顔つたら。ほ、、、。』と、清香は態と腹を抱へて笑ふ。そして彼女は姐さんがいつてしまふのをそれとなく待つてゐるが、姐さんが起ちかけると浮々した調子で、

『姐さん。濟みませんけど、どうか熱いお躰子を下さいな。』と、云ふ。



姐さんは物馴れた調子で合點きながら、やがて外へ出ていつてしまつた。その紙襖がぱつたり閉まると清香はさも待ち兼ねてゐたやうに、突然敬次郎の傍へ摺り寄つて、

『若旦那。私、逢ひ度うござんしたわ。』と、今迄とはまるで違つた涙聲で云つて、敬次郎の膝のうへ、凭れかゝる。よくみると涙に濡れたその顔には眞實逢ひ度さに耐へられなかつたやうな色が浮んでゐるのであつた。

敬次郎も何かなしに身につまされて、そのまゝ顔を背けてしまつた。清香はその手を握りしめながら、しばらくの間はものも云ひ得ないやうに咽び泣きしてゐた。

## 八十一

敬次郎は泣き浸る清香の顔をじつと見ながら少時の間は何う口を切らうかと思ひまどつてゐたが、やがて自分も悲しうな聲音になつて、

『それで、一體君はいつ東京へ出て來たんだい？』と、訊く。

清香は漸う顔をあげて、

『あの、私、實は昨日の朝まゐりましたの。すぐにあなたのところへお訪ねしようと思つたんですけれど、いろいろ取込んだことがあつたもんですから、……』と、云つて、じつと敬次郎の顔をみながら、『私ほんとうに逢ひ度う御座んしたわ。』と又涙聲で云ふ。

敬次郎はそれやこれと清香の身のうへを思ひ遣りながら、

『併しそれにしても此方へ來るとは君も随分思ひ切つた眞似をするね。あゝ、は云つてゐたが僕はまさか東京で君に逢へようとは思はなかつた。』と、云つて、初めて微笑んでみせながら『一體、僕の居處がどうして君に分つたんだね。僕は親父にさへ隠してゐるのにそれが君に分るのは實に不思議だ。』

『そりや貴方女の一心ですもの、地面の下へ隠れて被居つたつて私きつと見付出してみせませすわ。』と云つて、眞紅に泣き膨らしたその眼に微笑を浮かべながら、『實はね、私今朝身の振方がきまるとすぐに本郷の下宿へいつたんですわ。あの下宿の名をどうして知つてゐるかつて



云ひますと、それはかうなんです。丁度松本をたつ前の晩に私田口の旦那に逢つたんです。さうすると貴方が東京へおいでになつた話が出て、私しきりに貴方の行つて被居る先を伺つたんですわ。すると田口の旦那の仰有るにはね、實は俺もまるで當てがつかないんで困つてゐるが、併したしかに石井さんとかいふお友達のところへ聞けば分るだらうからと仰有りましたの。それで私田口の旦那にその石井さんの被居る對芳館の番地を調べて頂いて、それを當てにして出て來ましたんですわ。』

敬次郎は呆れて、

『ちや田口に聞いたのかい。彼奴もお饒舌で困るなあ。』

『い、え、田口の旦那は決してそんな面白半分で仰有つたんぢやないんです。私があんまり夢中になつてゐるんで心配して教へて下すつたんです。そうしてあの方も貴方のことをひどく心配して被居いましたわ。』

敬次郎は苦笑ひをして、

『さうだらうとも、僕はずつと前に田口だけに東京へ來ることを打明けて話したんだからねえ。その時には彼奴もひどく賛成して呉れたんだが、……。さうして君は今日對芳館へ來たのか？』

清香は頻りに涙を拭きながら、

『あの、今朝私一寸對芳館へ伺ひましたの。さうしたら若旦那はもうお引越しになつてしまつたといふんでせう。私、ほんとに落膽してしまひましてねえ。その石井さんとか仰有る方にお眼にか、つてよくお話を伺はふと思つたんですけど、その方も生憎學校へいつて被居るといふんで、私、お帳場の人に頼んでやつと貴方が柳田先生のお宅に被居るといふことを確かめて貰つたんです。さうしてすぐにもそちらへお訪ねしようと思つたんですけど、考へてみると私のやうなものが伺つて又貴方にどんな御迷惑をかけるか知れないと思つて、そのまゝ、一度又宿へ歸つて來ましたの。』

『ちや午後家に訪ねて來たのは君ぢやないのか？』



『い、え、ところがねえ、私お手紙かなにかで申上げようとは思つてゐたんですけど、もうとてもそんなことはしてゐられなくなつてしまつたんですわ。もう一刻も早くお眼にかゝり度くつてどうしても我慢が出来なくなつたもんですから、到頭悪いとは思ひながら又柳田先生のお宅へ伺つてしまひましたの。』

## 八十二

敬次郎は黙つてその話を聞いてゐるが、やがて重々しく口を切つて、

『それぢやさつきやつて来た女といふのはやつぱり君だつたのか。丁度生憎家の先生が取次ぎに出たんで僕はあとで家へ歸つてから先生に散々油をとられたよ』

『まあ、さうでしたか。ほんとに済みません。私、こんな風をしてあのお玄關へ入つていくのは厭だつたんですけど、貴方にお眼にかゝり度い一心で前後のことを考へるだけの力がなかつたもんですから。ほんとに御迷惑をかけてしまひましたわねえ。貴方先生から何か仰有

られたんぢやありませんの』

敬次郎は何か云ふと喜久子の話もしなければならぬので、彼は軽く首を振つて、態とさあらぬ顔をしながら、

『いや、格別取留めたことは云はれやしないけど、併し僕はひどく間が悪かつた』と、云つて、午間のうちのことを思ひ出すやうな顔になりながら、『それにしても君が對芳館へ来たんなら、何かあすこで云ひさうなもんだのになあ。僕は夕方學校から歸りにあすこへ廻つてつひ今しがたまで石井のところまで遊んでゐたんだもの。』

『い、え、それは下宿ぢや私とは知らないにきまつてゐますわ。私、乗つていつた俵夫に聞いて貰つたんですもの。田口の旦那のお話しぢや石井さんとか云ふ方は大層堅い眞面目な學生さんだといふことでしたから、私態と御遠慮しましたのよ。』

『さうかい。それで下宿ぢや何んにも云はなかつたんだな。』と、云つて、敬次郎は煙草に火をつけながら『いや、兎に角そんなことはまあ何うでもいい、として、一體松本の方は何うし



て来たんだい？まさか遁けて来たんぢやあるまいね。」と、不安さうに聞く。

清香は妙に悲しそうな顔になつて、少時の間は俯向いて返事もしなかつたが、やがて涙にぬれた顔をあけて、

『ねえ、若旦那、私やもう自棄なんですわ。今詳しいお話をしますけど、まあ、もう少し呑みませうよ。お酒に酔はなけりやとでもお話は出来ませんわ。』と、云つて、手を叩いて女中を呼んで、熱い酒が来ると、それを敬次郎にもすゝめ、自分も手酌でぐいぐい飲んだ。

清香は案の定松本の方を遁けて来たのであつた。あれから何う呼び出しをかけても敬次郎がふつりとも顔を見せないの、彼女は幾度か安井の邸の周圍をうろついて歩いたりした。そのうちに父親の宗左衛門の口からふつと敬次郎が金を持つて家出をしたといふことを聞いたので、清香はもう一刻の間もじつとしてゐられないのであつた。父親はひどく敬次郎の仕打を憎んで、酒に酔ふといつもきまつてあんな息子は勘當してしまふと口癖のやうに云つてゐたといふ。それを聞く清香の胸は張り裂けるやうであつた。あんな大家に生れた若旦那がも

し勘當にでもなつたら見ず知らずの東京で何んな苦勞をなさることであらう。それにつけてもどうかして是非一度お眼にかゝり度い。彼女はその思ひにつまされて、毎晩々々敬次郎のことを夢にみては枕紙をしとゞに濡らすのであつた。

そのうちに父親の宗左衛門の方の問題は愈々切迫して来た。もし彼の意に従はなければ清香の抱へられてゐる家は立ち行かないやうな羽目になつて来たので、彼女はもう愈々度胸をきめて遁ける手段を考へだしたのであつた。戀ひのためには死ぬ女さへある。それにもうこれほど諸處方々と流れ歩いて身を持ち崩した自分である。前借を踏み倒して警察の手で取押へられ、暗い牢屋へ入れられるとしてもそれはいとしい若旦那の爲めである。清香はそんな無茶な氣になつて到頭一昨日の晩、座敷から歸りにふいと汽車に乗つたのであつた。

### 八十三

清香は松本から東京までの夜汽車のなかでひと晩まんぢりともしすにいろいろ東京へ出て



からあとのことを考へた。先づ何よりも敬次郎に迷惑をかけてはならないので、身の振方から極まりをつけてさうした後で敬次郎に逢はふと思つた。で、彼女は停車場からすぐその足でもと厄介になつてゐた下谷の春本といふ藝者屋へいつてみた。その家の姐さんはなかなかしつかり者で、清香が金龍の名でその土地で稼いでゐた時分から向ふ見ずな彼女の氣性に打込んで、切迫するまで面倒を見て呉れた人なのであつた。土地の首尾を散々してしまつてからも、何かと意見をして呉れたり、親切に世話をして呉れたりして、清香が愈々都落をする時にも泣いて止めて呉れたのはこの姐さんばかりであつた。そんなことがあるので、清香は旅へ出ていつもその姐さんのことを思ひ出しては懐しがつてゐたのであつた。東京で出るとなればもうあの姐さんより他に頼りにする人はない。あの姐さんのことであるからきつと零落れ果てた今の自分を救つて呉れるに相違ないと思つて彼女はすぐさまそこへ訪ねていつたのであつた。

姐さんは思ひ懸けない清香の顔をみるともう呆氣にとられてゐた。段々事情を話すと姐さ

んはひどく氣の毒がつて、それだから私が云はないことぢやないといつた。そして昔のことはもう水に流してもし清香が再びこの土地でつとめて見る氣があるなら嬉んで抱へてやらうと云つて呉れた。

それを聞くと清香は涙の出るほど嬉しかつた。心のうちでは姐さんの方を向いて拜んでゐた。そして今度出る金で松本の方の話さへつけてしまへば何ももうそんな田舎に引懸りはないのでだからちつとも心配する要はない。もう親船に乗つた氣で安心してゐろといつてひどく力をつけて呉れた。

事實清香には今八百圓ほどの借金が残つてゐるのであつた。春本で出るとなると少くとも千圓の金は貸して呉れるので、その金で松本の方の借金は綺麗に濟んでしまふ筈であつた。姐さんは又清香が松本へその談判をするために歸つていつたら、何んな酷い目に逢はされるか知れないから、これは一切口の利ける男に頼んでしまふ方がいゝと、そんなところまで親切に氣を廻して呉れた。そして土地の事務所にゐるさう云ふことの扱ひのうまい男に頼んで



今朝松本へ向けて立つて貰つたのであつた。それ故もう兩三日のうちにそつちの方の形はつく筈であると云つた。

清香は盃を啣みながら

『それで私も、實はこの十日が日が吉いからその日に春本から清香の名で披露目をしようと思つてゐますの。姐さんはもとの名の金龍の方がい、つて云ふんですけど、私、若旦那には清香でお眼にか、つたんですから、矢張り清香にしようと思つてゐますの。その方がようございますわねえ。』と、云つて清香は艶めかしい嬌態をしながらじつと敬次郎の手を握つた。

敬次郎は聞けば聞くほど不思議な氣がしてならなかつた。思ひ切つた清香の性分としては出奔して來たのも無理のない話である。漸次考へてゆくと、今日の父親の手紙に書いてあつた女と手を携へて云々の文言も譯が分つて來る。父親は清香が遁けたと聞いて、きつと自分と打合せをして断落ちをしたものでも思ひ僻んでゐるのであらう。その腹立ち紛れにあんな手紙を寄越したのに相違ない。さう思ふとひどく淺猿しい氣がして來た。

清香は握つてゐた手を離して、敬次郎に酌をしてやりながら

『若旦那。私自分の話ばかりしてほんとに濟みませんわねえ。ほんとにそれはさうと若旦那の方はどうなりましたの？、私それが心配で心配で耐らないんですわ。』と、云つて、その顔を下から見上げる。

敬次郎は黙つて唯俯向いてゐた。

#### 八十四

敬次郎は清香にさう聞かれると堪らなく胸が迫つて來た。彼は東京へ出て來てからのことをすつかり打明けて話したあとで、

『君はまだ知らないだらうが、僕はいよいよ今日親父から勘當の宣告を受けたんだ。親父は僕が君と一緒に遁けたと思つてゐるらしいんだ。それでひどく腹を立て、今日酷い手紙を寄越したんだ。』



清香は胸に手を置いて、

『まあ、……』と、云つたが、やがて又悲しさうな眼色になつて、『ぢや若旦那も到頭勘當になつておしまひなすつたんですかねえ。私もそんなことぢやないかと思つて、今の今まで心配してゐましたんですわ。つまり私が貴方の跡をしたつて遁けて來たんで、そのために大旦那の御機嫌をそこねたんですわねえ。つまり何も彼も私の爲めなんですわねえ。』と、しんみり云つて、思ひに沈みながら、『それで若旦那。これから先貴方何うなさるおつもり？』

敬次郎は酔つた顔に眞面目な色を現はしながら、

『何うもかうもないさ。僕はもう最初から勘當される覺悟でゐたんだ。どうせ東京へ出りやもう誰れの助けも借りずに、どんな苦しい目を見ても構はずり徹すつもりでゐたんだ。それに幸ひさうなると捨てる神もありや又助ける神もある。まことにお恥かしい話だが、僕は石井の周旋であの柳田先生のところへ食客に入つたのさ。もう昔の安井の若旦那ぢやない、他人の家の飯を食つて、他人に使はれる意氣地のない食客になつてしまつたんだ。』

それを聞くと清香はぼろぼろ涙を流して、

『ほんとにさぞねえ。私やそんなことを伺ふとるても耐らなくなりませわ。若旦那がさうおなりなすつたのも皆私のためなんです。どうか勘當して下さいませ。その代り若旦那、私がかうしてこの土地で出たからにはもう決して貴方に御不自由はさせませんわ。私にんなに辛い思ひをしてもきつと若旦那を立て徹してみせますわ。なあに私だつて死ぬ氣になつて稼ぎや若旦那おひとりぐらゐる派に立て徹して見せます。さうしてそんな食客なんか一日も早く止めてしまつて、學校の方の御勉強の出來るやうに下宿か何かなされるやうにきつとしてお眼にかけます。それが私一生の望みなんですもの。どうか後生ですから私にそれをさせて下さいませな。』

敬次郎はさう云はれると何かしら勘當の身の果敢なさ、情なさが身にしみじみと迫つて來た。女に立て過ぎされて立身出世をするなど、云ふやうな意氣地のない境涯には死んでも、土に嚙りついてどうにかして落ちまいとは深く決心してゐながらも、若い彼には清香の一途



に思ひ込んだ情が嬉れしくて耐らなかつた。松本にゐる間にはさほどにも思はなかつた清香もかうして今夜他郷の空で出遇つてみると耐らなく懐かしくなつて来る。しかも彼女は自分を慕つてはるばる苦勞を重ねにこの土地へやつて来たのである。それが男の身として嬉れしくなくて何としよう。

二人はそうしたまゝ、しつぱりと涙話に耽つてゐたが、清香はやつと自分の思ひが届いたといつて酔へば酔ふほど嬉れしさうな顔になつていつた。そしてやがて自分で酒を取りに階下へ下りていつたがその隙に敬次郎は座敷の向ふにある牀懸窓の障子をそつと開けてみた。

もう四邊は絃歌の聲をおさめてひつそりと更け渡つてしまつた。不忍の池から上野の森は蒼ざめた月色に煙つて、池面には枯れ朽ちた敗荷の間に銀鱗が限りもなくちろめいてゐる。池の向岸には針の頭ほどな紅い提灯の火が動いて、寒氣はしんしんと肌に迫つて来る。とみるともうそこいらの家根のうへには雪のやうな霜が眞白に置いてゐるのであつた。

清香はしばらくすると又上つて来て、いきなり敬次郎の後へ立つてその肩を抱くやうにし

ながら、

『あら、若旦那。もうお月様があんなところへ落ちてしまひましたのねえ。』と、ひつそりした聲で呟いた。

敬次郎にはその夜の情趣が耐らなく嬉しかつた。

## 八十五

その晩は、敬次郎も清香も殆んど前後不覺になるほど酔つて各自の心の底を打明けあつた。二人はいつかしら戀と戀とでかたく結び合つたやうな心持ちになつていつた。清香も今宵はひと夜しつぱりと語り明かさうといつて聞かなかつたが、敬次郎は柳田先生のことを思ふとどうしても家を明けたりするだけの勇氣が出ないので、又の逢瀬を約してやつとのことで清香の傍を離れた。そして何處をどう歸つたとも知らずに、彼はもう三時近くなつてからやうやう小石川の先生の家へ辿りついた。それも翌朝になつて辛うじて思ひ出したくらゐであつた。



その翌日から敬次郎は朝早く起きて學校へ通ふ身になつた。前の晩遅く歸つたことも幸ひ先生の耳には入らないらしかつたので、彼は朝飯もそこそこにして家を出た。學校へいつても彼は妙に心持が弾まなかつた。清香の酔つた、しどけない姿や、身も心も任せきつたやさしい睦言が眼に見え耳に聞えて耐らなかつた。講義を聞いてゐると、ふつとその言葉の間から清香の名が浮き上つて来る。彼は一日うとうとして暮らしてしまつたのであつた。

日の暮れ方になつて家へ歸つて来ると、たつたひとりになつた寂しさが、又彼に物を思はせる。清香とももうかうなつた以上はこれから先すけなく振切つてしまふといふ譯にもいかない。敬次郎とても血の湧く若い身空である。女が思ひ詰めて夢中になつて寄りか、つて来るものをどうして避けることが出来やう。彼はふつとした時に全く戀の陶酔のやうなものを覺えずにはゐられなかつた。さうなると彼も耐らなく逢ひ度くなつて、胸が頻りに躍つてくるのであつた。

日は日と過ぎ去つていつた。清香からはその後どうしたものかさつぱり便りがなかつた。が丁度彼女が上京してから五日目にふと長いながい手紙が来た。それには抑へるにも抑へきれないやうな思ひが書きつらねてあつたが、併し敬次郎にしてみると、来いといはれたとてさうおいそれといかれるものではない。此間行つた君の家といふ家は少しも遠慮のいらぬ家だからいつでもやつて来て呉れとは書いてあつたが、金といつても餘裕のない今の身で、彼はさう女の云ふがまゝにのめのめと出向いてもいられないやうな氣がした。

十日の日には清香もいよいよ目出度く披露目をした。幸ひ昔の馴染の茶屋や待合でも何かと氣をつけて呉れたので、もと逢つてゐた客なごにも幾人となき逢ふことが出来て、それに姐さんのお庇護で約束なごの数も可成りついたのであつた。

その晩もう十二時頃になつて是非来いと云はれてゐたので、敬次郎はうかうかした氣で又君の家へいつてみた。と、清香は方々の出先を廻つてやつと一時頃になつて例のごとくひどく酔つてやつて来た。白襟に紫紺の色模様の出の着物を着た彼女は、よろよろしながら座敷



へ入つてくると、突如敬次郎の膝へ崩れるやうに手を突いて、

『若旦那。貴方も随分ねえ。あんなに手紙をあけたり何かしてゐるのに、何故来て下さらないの。貴方、まだ私の心を疑つて被居るんでせう。きつとさうだわ。』と、恨めしさうに云つて涙含んでしまふ。

敬次郎は呆れて、

『おい、君、逢ふと直ぐから涙を見せるのはあんまりぢやないか。そりや僕だつて來度いのは山々だ。併し此間も約束した通り、僕はもう安井の若旦那ぢやないんだ。人の家の居候をして勉強してゐる體なんだぜ。ほんとにそこはよく考へて呉れなけりや困るんだ。』と、眞顔になつて云ふ。

清香は黙つてその顔を見つめてゐた。

## 八十六

清香は黙つて見詰めたその眼からやがて意氣地もなくほろほろと涙を零して、

『さう云へば若旦那、全くですわねえ。此りや私が悪うござんした。つひ私我儘が出ちまつて、ほんとに貴方、御免なさいましょ。』と、やさしく云ふ。

敬次郎もその様子をみるとほろりとして、

『いや、さう云はれると僕も困るんだが、併し全く人間の世の中といふものはまゝにならないもんだ。お互に松本にゐたら、今頃はどんなことになつてゐるだらう。それを思ふと僕は變な心持ちがして來るよ。』

清香は頻りに敬次郎に酒をすゝめて、

『でも私、もうその事は考へないつもりですよ。かうなつてゆくのがお互のなりゆきなんぢやござんすまいか。』と、云つて、自分も頻りに手酌で飲みながら、『でも私ほんとに貴方に毎日でもお眼にか、つてゐるたくて耐まらないんですわ。我儘を云ふやうですけど、私それではなけりや毎日かうして辛い稼業をしてゐる甲斐がないやうな氣がするんですもの。ねえ、



若旦那、貴方お暇の時にはいつでもようござんすからどうか此家へ被來つて、私に逢つて下さらないこと？」

『さあ、そりや僕だつて逢ひ度いには逢ひ度いさ。併し毎日學校へ通ひ出してみたら、何分にも時間が自由にならないし、それに第一金がないからねえ、……』

清香はそれを手で抑へて、

『あら、お金なんかのことは私がちつとも御心配をかけやしませんわ。そんなことはちつとも御心配なさらなくつてい、のよ。私唯お眼にか、れさへすりやい、んですもの。』

敬次郎は少時の間黙つて酒ばかり飲んでるたが、やがてふらふらしてゐる清香の顔をじつとみて、

『だが清香。君もあんまりお酒を飲むのだけはよしてお呉れよ。君は今迄何處の土地へいつてもきつとお酒で失策つて、到頭あんな松本三界まで流れて來たんぢやないか。君がさうして毎晩酔つぱらつて歩くのかと思ふと僕はほんとに心細くなるんだ。僕だつてあゝして人の

家の食容をして、片手で學校のことを勉強するのは實に辛い。だから君もどうか僕と同じやうな氣になつて、今度は身持ちだけはたしかにしてお呉れ。それでないと共倒れになつてしまはなけりやならんからねえ。』としんみり云ふ。

清香はそれを云はれると顔を伏せて泣きながら、

『有難うござんす。若旦那、ほんとによく仰有つて下さいました。私實は昨夜も家の姐さんから呉々も云はれたんですの。今度ばかりはお酒をつ、しんで、土地の首尾を悪くしないやうにしてお呉れつて、そりやもうこの胸にこたへるやうに云はれたんですの。私ももうほんとに今度こそお酒を止めようと思つてゐるんですけど、つい若旦那にお眼にか、り度くなつたりすると、お酒がないぢやられないもんですから。……』と、云つてしくしく泣き出してしまふのであつた。あの氣のきつい、負け嫌ひの清香が、戀のためにはかうまで涙弱く意氣地がなくなつてしまふのかと思ふと敬次郎はさすがに我が身のことと思はずにはゐられなくなつて來た。



敬次郎はもうどうせかうなつたからにはお互に腹をかためて、今度こそなるべく苦勞をしあはないやうに、又失策の深みへ落ちないやうに月日を過ぎしていかうぢやないかと云つて頻りに身持ちのことを心配してやつた。清香もさういはれると敬次郎の心持ちが胸にしみじみと覺えられるとみえて、唯顔を伏せてしくしく泣いてゐた。

その晩もたつた一時間ばかりの逢瀬で敬次郎は先生の家が氣になるので、そのまゝ、氣を引立て、別れていつた。

### 八十七

それからは敬次郎も逢ひ度い、なつかしいといふ思ひには責められながらも、前途のことを考へると、さううかうかしてゐる譯にもいかないので、清香から呼び出しが來ても、三度に一度は斷るやうにしてゐた。清香も敬次郎の腹のなかはよく分つてゐるので、我儘は云ひながら頻りに身持ちをたしなんであつた。酒も可笑しいほど控へめにして、一つでも餘計に座敷

を勤めるやうに一心になつて稼いでゐた。年の割りには度胸もあり、藝もあり、それに客の氣心を呑み込むことをよく知つてゐるので、清香は僅かふた月ばかりのうちに土地でひどく賣り出して來た。もとの金龍時代とはすつかり違つてさすが苦勞をしてきたゞけに人間が落ちて來たといつて、主人の姐さんも嬉べば、出先の茶屋々々でも嬉んだ。従つて収入もよく、たとへ敬次郎とちよくちよく逢曳をするにしても、清香は少しも不自由をしなかつた。それ故正月なども並はずれて約束の數もつくし年暮も店出しの割りには立派に切りぬけたのであつた。

敬次郎の方も今が氣の入つてゐる盛りなので、新しい學期が來る迄には大概一年間休學した間の課程を取返すめどもついた、學校でも隙さへあると圖書館へ入るやうにして、彼は一心になつて勉強したのであつた。

柳田先生もどうやら彼が落着きだしたので、いろいろ目をかけて面倒をみてくれた。晩遅くなつてふつと敬次郎の部屋へ下りて來て、自分の専門以外の法律論などを聞はせるやうな



ことなぞもあつた。先生は飽くまで敬次郎を鞭撻して、一時も早く學校を卒業させてやらうといふ熱心をもつてゐた。それも敬次郎の明晰な頭腦と純良な性格が先生にもよく分つてゐたからであつた。

松本の方の郷里からはその後何とも云つて來なかつた。父から何か云つて來るだらうと思つて、それとはなしに心待ちに待つてはゐるが、併し何の音沙汰もなかつた。さうなると妙に氣合抜けがしたやうで、彼は反對に此方から何か云つてやらうかと思ふやうなことさへあつた。敬次郎は黙つて日のたつてを見てゐた。

廣田の小父にはそれでも前後に三度ほど便りをした。幸ひ柳田先生の家へ厄介になつて、體もきまり、勉強も出来るやうになつたから安心して呉れ。いづれ近き將來に錦を着て故郷へ歸ることもあらうから、それまではどうか生家の方のこともそれとなく見てやつてくれといつて、宗左衛門の憤怒や、廢嫡云々のことなぞは態と報らせてもやらなかつた。小父からは手紙の都度に、勉強をすゝめる返事が來た。

敬次郎は殆んど一週間に二度ぐらゐる割合で清香に逢つてゐた。それもなるべく勉強の妨げにならないやうに、何も用のない時を選んでこつそり君の家へ出懸けていつた。そして夜もなるべく早く歸るやうにしてゐた。それ故、柳田先生も石井も彼がさうした秘密をもつてゐるとは少しも知らないらしかつた。

清香はさすがに人には盡くされないほど一心になつて敬次郎のために盡してくれた。食客の身ではつい思ふやうに小使ひなども得られない。敬次郎が云はなくても清香はちやんとそれを察して、逢ふ度にそつと彼の財布のなかへ幾らかづ、入れて置いて呉れた。そして参考書や講義に入用な書籍なども心を配つて買つて呉れた。或時なぞは佛蘭西の政治史が欲しいと一寸洩らしたのを彼女は小耳に挿んで、自分で丸善まで買ひにいつて、二十七圓もする本をよちよち君の家までかついで來たりした。君の家では女將をはじめ、女中までがひどく清香の心中立てに感心して、陰になり日向になり、何かと力になつてやつたのであつた。春本の姐さんも敬次郎のことはよく知つてゐた。



敬次郎も清香の情にはほとほと感入つてゐた。もつと色戀の浮いた沙汰になるのかと思つてゐたのに、清香の心持ちには少しも遊びらしいところがなくて、あんまり生真面目なので、彼も少なからず驚いたのであつた。松本にゐた時分には清香がこんな人間であらうとは夢にも思はなかつた。

彼は佛蘭西の政治史を買つて來た清香をみた時にはさすがに、涙ぐんで、

『おい、君。ほんとにこんなにして貰つちや僕は何うして、か分りやしない。それでなくつてもいろいろ世話になつて氣の毒だと思つてゐるのに、僕はほんとに困つちまふなあ。』と當惑したやうに云ふ。

清香は覺でやかに笑つて、

『ほ、、、。何も困ることはないぢやないの。私は着物や食べものを買つて來たんぢやあ

りません。こりや貴方の學校のためになる本ぢやありませんか。これをお讀みになりや貴方がえらい方になれるんでせう。せめて私にもこれぐらゐなことはさせて下さいましな。』

敬次郎は頭を掻いて、

『ほんとに何から何までよく氣が廻るなあ。藝者つてそんなもんかねえ。』と、眞實を示しながら云ふ。

清香もしんみりとした顔になつて、

『ねえ、若旦那。いくら藝者だつてやつぱり人間ですもの、それ相應の考へはありますわ。殊に私なんかほんとに一生命なんですもの。人は色戀は楽しい嬉しいものだつて云ひますけれど私のはさうぢやないの。全く苦勞をして少しでも人間らしい勤めがしたさにかうしてゐるんですわ。ほんとに貴方のためにや死なうとまで思ひつめたんですものねえ。』と、敬次郎の顔を眞面に見ながら云ふ。

その頃には酒も二人でやつと一本か二本しか飲まないの、二人とも自分の感情に巻き込



まれて、泣いたり笑つたりするやうなことはなかつた。それほど二人の間は眞面目になつてゐたのであつた。

清香はひどく感じ入つたやうな顔になつて、

『でも貴方。考へてみりや藝者なんて詰らないものねえ。白粉をつけて、い、着物を着て自分で飲み度いとも思はないお酒を飲まされて、お客様の遊びものになる。私此頃それを考へるとしみじみ厭になりますわ。それにつけても素人の方は羨ましいわね。お嫁にいき度いと思へばいつだつて行けるしほんとに私みたいに身を持ち崩してしまつちやもう駄目ですわねえ。堅氣になり度いとつくづく思つても世間でさうさせて呉れないんですもの。』

敬次郎もしんみり清香の身のうへを思つてやりながら、

『ねえ、君。此頃お父つさんや兄弟には逢ふかね？』と、つかぬことを訊く。

清香はそれを云はれるとふつと涙含んで、

『い、え、私、東京へ来てからたつた一度しか逢ひませんの。私また逢はふとも思ひません

わ。親なんていふものは此方で思ふとはまるで違つて、何か折さへあれば私を食ひものにして、食ひものにしてしようと思つてゐるんですもの、うっかりい、顔でも見せりや身ぐるみ剥ぎ兼ねまじい性根なんですわ。ですから私もう親兄弟なんかちつとも頼りにしちやゐられななんです。ほんとに孝行の出来ない親をもつほど不幸なことはありませんわ。』と、云つて、敬次郎の顔ばかり見ながら、『それにつけても若旦那。貴方だけはいつまでも私をお捨てにならないで下さいましな。私末のことを思ふとほんとに何んだか心細くつて仕様がななんです。若旦那が學校を卒業なすつて、奥さんをお迎へになる時のことを夢にまでみるんですわ。私や若旦那がそのま、一生勘當になつてゐて下さりやい、としみじみ思ひますわ。』さう云つて清香は寂しく笑ひながら泣くのであつた。

## 八十九

敬次郎はそんなにまで清香に思はれてゐても、それでゐて又一方では何うしても喜久子の



ことを忘れることが出来なかつた。ふつと夜半に眼が覺めたりすると、眼の前に髻として立現はれて来るのはあのいちらしい喜久子の面影であつた。肉襦袢一枚の甲斐々々しい姿で七間の虚空でさながら蜘蛛のごとくに危い藝を演じてゐる幻であつた。それを思ひ出すと、無邪氣らしい頬に流れる涙の色も見えてくる。松本から東京までの不思議な旅路の様も思ひ出されてくる。その時に云つた言葉の端々までもまるで今聞くやうに心の面に浮んでくる。あ、今頃は何處の國里で、どうして日を送つてゐることであらう。一度別れてから後はその消息も風の便りにさへ杳として聞えて來ないのである。清香に逢ひにいく度に思ひ出して佐竹の家へも立寄てもみるが、そこにも何の音沙汰もなかつた。お常はひどく行方を心配して、いろいろな傳手を捜してはきいてまはつてゐるが、まるで雲をつかむやうでさつぱり分らないのであつた。或ものは天羊の一座へ加はつて、東北地方を巡業して歩いてゐるといひ、又或者は名も知れぬ一座へ入つて遠い北海道へ流浪していつてゐるといつた。いづれもほんの人の噂や臆測で、確かな據所のある話はひとつもなかつた。お常はまるで自分の娘でも誘

拐されたやうに、敬次郎の顔をみると愚痴ばかりこぼしてゐた。世界館の樂屋番の親爺も此頃ではもう匙を投げてゐるといふ話であつた。

敬次郎は喜久子のことを思ひ出すと、もう残りの夜を眠ることが出来なかつた。月のい、晩には硝子窓から忍び込んで來る蒼ざめた光を見ながら思はず悲しい心持に責められて、涙含むことなどもあつた。今頃は見も知らぬ異境をさすらひ歩いて、雪の深い樂屋でまんぢりともしず泣き明かしてゐるのではあるまいか。無限に廣がつたこの空の下何處かで生れついた悲しい運命を嘆き侘びながら切ない思ひに沈んでゐるのではあるまいか。あ、云つてゐたからにはせめて居處でも知らせて呉れさうなものである。それもしないところをみると、或はもう此の世のものではないのではあるまいか。さう思ふと敬次郎は胸を掻き撈られるやうな心持ちさへして來るのであつた。

東北へいつたといふからにはきつと雪の深い國々で苦勞を重ねてゐるのであらう。もし世にないものとすれば詮方もないが併し生きてゐるとすれば何とかして便りぐらゐはして呉れ



さうなものである。彼の喜久子は自分のことを何と思つてゐるのであらう。たとへ自分には何事も知らせずと、あの佐竹の方へは何とか云つて寄越しさうなものである。それもないうところを見ると、或はさうした不吉な想像が當つてゐるのではあるまいか。

敬次郎は喜久子が鞆のうへから危くも墜落して重傷を負つた有様を夢にみたりした。又或時は惨い仕打にか、つて牛馬にも劣つた扱ひを受け、干物のやうに骨と皮ばかりになつて野倒死してゐる喜久子の姿を妄想した。さうするときつと彼は自分の胸を壓し狭められるやうな氣がして、あらゆる手段を講じても何うかして喜久子の行方を捜しだし度くて耐らなくなるのであつた。

敬次郎は講堂で講義をきいてゐる時や、たつたひとりで圖書館で書見をしてゐる時などに清香のことよりも却つて喜久子のことを思つた。日が経つに連れて、その思ひは漸々とのぶかく心に喰ひ入つて来て、日の光を眺めながら夢をみてゐるやうな心持ちになることが多くなつていつた。しまひには清香に逢つて睦ましく話をしてゐる時にも、ふつと喜久子の面

影を宙に描くやうにさへなつていつた。

清香はそんなこと、は夢にも知らないで、敬次郎が陰鬱な顔をしながら黙り込んでしまふと、ひどく心配して、いろいろに氣を揉むのであつた。

### 九十

もとの古巢で出てから四月五月と日が経つに従つて、清香も漸々と身のまはりのことで苦しまなければならぬ時が来た。敬次郎の方へも月々融通する金も要る、それに何を云つても君の家の方の勘定や逢曳の費用などは一切清香が立ひいてゐるのだし、田舎と違つて土地で名が出てくればそれ相應にいろ／＼な義理も出て来る。清香ら一生懸命になつて稼いではみるのだが、それでも漸々と手許が不如意になつて来るのであつた。抱への身であつてみれば、他に金の融通のつけやうがないので、つひ主人の姐さんに頼んで先々と借金の根柢ぎをする。それでも足りなくなると今度は出先にもつひ不義理が出来てくる。



姐さんは前の金龍時代に懲りてゐるので今度はどうかして自暴にならないやうに、捨て鉢にならないやうにと陰ながら頻りに心配してゐた。前の時にも深くなつた男が歴とした家の息子で、しかも大學生であつたので、今度も主人の方ではそれをひどく心配してゐるのであつた。清香は敬次郎が勘當に逢つてゐることはさすがに姐さんには打明けてないので、姐さんの方では頻りに清香の金づかひの荒いのが不思議に思はれてくる。つひ氣が廻つていろいろなことを搜つてみると、先づ敬次郎のことは君の家の方からすつかりばれて來たのであつた。

姐さんは敬次郎の素性が分ると今迄は見てみぬ振りをしてゐたのが、もう黙つてはゐられなくなつてくる。眞から清香の行末を思つて、姐さんは或日のことしみじみ清香に云つて聞かせた。

と、清香はその親切にほだされて自分の思つてゐることをすつかり打明けて話してしまつた。敬次郎とのそも馴れ染めからかうなるまでのいきさつを物語ると、それを聞いた姐さんはさすがに苦勞人だけあつて反對にひどく感心して、却てもう小言を云ふことも何も出來なくなつてしまつた。それほどまでに思つてゐるものを、今更切れてしまへなぞとは何うして云へよう。と云つて、此儘にして置けば深い借金の淵へ身を落として、清香は又昔のやうな亂暴な身持ちになつてしまふに相違ない。姐さんはほとほと當惑してしまつたのであつた。そこへ降つて湧いたのは清香にとつても姐さんにとつても極めて都合のいゝ話であつた。

それは他のことでもない。是非清香を世話しようといふ旦那の出で來たことであつた。

その旦那といふのは日本橋に店を持つてゐる大きな木綿問屋の主人で辻倉清兵衛といふ男であつた。初めは店に近い土地で遊ぶのが厭さに態と下谷へ來て、江戸家といふ待合で人の眼にたぬ遊びをしてゐたのだが、何をいつても四五十萬の大身代を抱へてゐる人なので、いつの間にか土地の姐さん株の間でも大事にされる客になる。その人の世話になつた妓はたとへ切れた後までも仕合はせに暮らすことが出來るといふので、誰れにでも羨まれるのであつた。



清香は金龍時代にもよくその人の座敷へ招かれていつたが、今度出てからは殆んどその人が江戸家へ来る度に最前になつてゐた。仲を取持たうといふのは土地でも一流株の金次といふ姐さんで、旦那から直接に仰せを受けて粹な役目に廻つたのであつた。

その話が持ち上ると春本の姐さんはひどく嬉んで、何が何んでも辻倉のものになれといつて聞かなかつた。たとへ敬次郎の方のことは何うあつても、それは清香自身の腕次第である。どうせこんな浮いた稼業なら、さうひとりの男に心中立てをしてゐるばかりが力量ではあるまい。苦しい思ひをして男に達引くよりも、旦那をとつてちやんと自分の身をたて、その上の娛しみにしたらよからう。辻倉の旦那なら、たとへ敬次郎のことが知れたとてそんな野暮なことは仰有るまいといつて姐さんの方はもう自分から乘氣になつてゐるのであつた。そして又姐さんの云ふことにはたしかに一理屈あつた。

## 九十一

清香もよく考へてみると辻倉は決して厭ひな人ではなかつた。もし旦那として世話を受けるならあゝいふ人の方がいゝ。さうは心のなかで思つても先づ第一に氣になるのは敬次郎のことであつた。かうしてゐるからには何うかして誰れの思も受けず、誰の厄介にもならず、たつたひとりであの敬次郎を達引いていき度い。さうしなれば何んだか二人の間に未始終面白くないことが起りさうでもあるし、又自分も敬次郎が他日志を得た時に鼻を隆くすることが出来ないと思つた。

いつまで迷つてゐても仕様がないので、清香は或日のこと敬次郎に打明けてすつかり相談してみようと思つて、すぐさま呼び出しをかけた。と、敬次郎は學校の歸りが遅かつたと云つて、もう十一時ちかくなつてやつと君の家へやつて來た。

清香は思ひ餘つてゐるやうな調子で早速旦那の一件を敬次郎に話してみた。と、彼は思つ



たよりも平氣な顔をして、

『いや、そりやよからう。僕も實は此間からそんなことを考へないぢやなかつたんだ。』と、云つて、一も二もなく賛成する。

清香はきつと敬次郎が返事をしるだらうとひそかに心の底では豫期してゐた。それにかうはつきり賛成されてみると、何んだか此方の方が力ぬけがして物足りなかつた。互に戀しあつた仲なら、そんな旦那などをとるのは止めにしろといふのが眞箇の情愛である。旦那とは云ひ條、やつぱり別な男を持つには相違ないのである。それに何の躊躇もなくそれを取れといふのは聞えぬ話である。さう思ふと清香は何かしら拗ねてみたくて耐らなくなつて來た。

清香は珍らしくぐいぐい酒を呷りながら、やがて涙含んだ眼つきをして、

『でも、若旦那。私がそんな旦那などをとつても、貴方何んともお思ひなされないこと？』と、情を迫るやうに云ふ。

敬次郎はしばらくの間黙つて考へ込んでゐたが、やつと口を切つて、

『だつて他に仕様がないうなら仕方ないぢやないか。そりや僕は厭だけど、厭だからと云つて、此方の云ひ分を徹す譯にはいきやしない。第一僕にはその資格がないんだ。』

『若旦那、又それを仰有る。もうかうなつたからには何にも今更らしく資格だなんて仰有らないだつてい、ぢやありませんか。私はそんなことを云つてゐるんぢやないんです。唯旦那みたやうなものがあつちや何んだか貴方と私の間に水が入るやうで、此れからしみじみお眼にかゝることも出来なくなるやうな氣がするんですわ。』

敬次郎は顔を背けて、

『併しいくら旦那が出来たつて、君の心さへ變らなけりや矢張り今迄通りに逢へる譯ぢやないか。藝者に旦那といふものはつきものさ。僕も此間から考へてみると、全く君もい、旦那のひとり位もつてゐなけりや遣りきれまいと思ふんだ。こんな僕みたやうなものがついてるぢやほんとに君だつて随分苦しいだらうと思ふんだよ。』



『でもその苦しみは初めつから覺悟の前なんぢやありませんか。何も今になつて苦しいの辛いのと云へた義理ぢやありませんわ。』

『いや、さうぢやない。僕さへもうちつとしつかりしてりや君はそんな切ない思ひをして旦那なんかとらなくたつて済むんだ。皆僕が悪い。僕が君にいろんな重荷をかけるんだ。』と云つて、敬次郎は急に雙眼に一杯涙を湛へながら黙り込んでしまつた。

清香はさう云はれると何かなしに胸が迫つて來た。若旦那はやつぱり私のことをそれほどまでに思つてゐるのだ。さう云はれてみると、清香はもう何處までも苦勞をしてどうかして彼を立派に成業させなければならぬと心の底でその決心を新たにしたのであつた。

## 九十二

敬次郎はしばらくすると涙の溢れた顔をあげて、眞實のこもつた聲が、

『いや、君にさう云はれると僕は全く濟まんと思ふ。僕は自分でも恥しい。自體僕は苦學を

するつもりで故郷を出て來たのだ。それに君なぞに迷惑をかけて、何とも申譯がない。僕はそれを思ふと自分を答へたくなるのだ。何といふ意氣地のないことだらう。』と慄へながら云ふ。

清香はそれを聞くと自分も泣きながら、

『若旦那、私が悪うござんした。私決してそんなつもりで申上げたんぢやないんです。初めをいへば此の役は私が買つて出たんです。それに今私が辛いからといつて、若旦那にいろんな御心配をかけるのは私があんまり勝手すぎました。私、この通り手をついてお詫をいたします。どうかお許しなすつて下さいましな。』と、云つて、いぢらしく兩手を疊のうへ、突いて、ぼろぼろ涙を流しながら、『ですから若旦那。どうかもうこの話はこれつきりになすつて下さいまし。もう私のことは何事も私ひとりで極めます。さうして決して若旦那にや御迷惑はかけませんから、どうか今仰有つたやうな悲しいことは仰有らないで下さいまし。お互にこゝまで來たからには、世話になるも厄介になるもないぢやありませんか。私やどんな辛い



目に逢つても、若旦那のためだと思へば何でもありません。ですから若旦那もそのところはよく噛み分けて下すつて、濟まないの、恥しいのなんてそんな水臭いことは仰有らないで下さいましな。」と、云つて、清香は頬に流れ出る涙を拭かうともしずに、下からじいつと敬次郎の顔を見上げた。

敬次郎はもつと何か云はうとしたが、その思ひ入つた眼色をみると堪らなくなつて、そのまま、傍を向いて口を噤んでしまつた。

その晩はそれつきり別れてしまつた。

清香は家へ歸つて來ると、もうひとつ座敷が云つてきてゐたのを斷つて、そのまま、臥床へ入つてしまつた。そして臥床のなかでまんぢりともしずに、身の行末のことを思ひ耽つたのであつた。

考へれば考へるほど清香には現在の境遇がよく分つて來た。昔ならもう一も二もなく酒を被ぶつて自棄に身を持ち崩してしまふところである。併しさすがの清香も俄に一度やつて來

た失策を今更又再び繰返すほど愚かな女でもなかつた。それと一緒に又敬次郎が大事だと思へば思ふほど彼女は身持を慎まなければならぬといふことを痛いほどよく知つてゐたのであつた。

敬次郎は今でも清香の厄介になるのを氣の毒がつて、どうかして清香の傍へ來るときには重荷にならないやうにしようとしてゐるのが清香にも見えてゐた。それが清香には一方から云ふと不安でならないのであつた。男が自分の仕向けることに甘んじて、自分に體ごと頼つて呉れるやうだと彼女は安心なのである。それに敬次郎は殆んど逢ふ度に此頃ではいつも意氣地のない身のうへだと云つては、そればかり悔やんでゐる。それが清香にとつてはひどく氣にか、つてならないのであつた。

清香はその晩曉方まで考へた末、兎に角辻倉の云ふなりに彼の厄介になる決心を極めた。どうせあゝした年を老つた旦那のこと故、色戀でどうのかうのといふのではあるまいから、唯立派な後楯として大事に勤めさへすればそれでいゝのであらう。そして敬次郎とは今迄と



同じやうに逢ひもするし、出来るだけのことは盡してやらう。それに姐さんも云ふとほり體が樂にさへなれば、敬次郎の方へもそれだけ多くつくせる譯になるのである。他に男を持つのは厭ではあつたが、しかしもうかうなつては何もかも戀しい若旦那である、火のなかへ飛び込めと云はれてももう厭とは云へぬ。清香はそんな思ひでやつと心をきめたのであつた。

### 九十三

清香はそれから三日ばかり經つて、金次姐さんの肝焦りで愈々正式に辻倉の持物になることになつた。辻倉は自分のものと極まると態々別に看板も買つて呉れて、春本の隣の細路次へ新たに分け清茂登といふ家を持たせて呉れた。そしてこゝ、少時の景氣を見据ゑたら抱へも置いてやらうといふし、もし何んならいつそ落籍してやつてもいい、といつた。清香はその親切を泣いて嬉んだ。春本の姐さんもそれを聞いてひどく嬉んで、世の中にお前ぐらい仕合は

せものはないと云つた。朋輩のなかでも誰れひとり彼女を羨まないものはなかつた。

清香はさうした幸福のうちの日を過ぎていつた。辻倉の恩義を思ふと、假りにも嘘は吐けないとは思つたが、併し敬次郎のことだけはどうしても打明けられなかつた。そして辻倉の方へも一生懸命になつて勤めるし、敬次郎の方へも爲めよかれと一心になつて心意氣をつくした。伶俐な清香はその間をうまくあやなして、ひとつも襤褸を見せなかつた。境遇さへ順潮にいけば、彼女はもとから胸ひとつで何でもすることの出来る性質なのであつた。

そのうちに上野の花の噂もいつしか夢と過ぎ、敬次郎には骨の折れる試験も無事に済んで、愈々都大路には釜底で煮られるやうな暑いあつい夏が来た。成績が發表されてみると敬次郎は平生から人一倍勉強した甲斐があつて、三番といふ好成绩であつた。それを聞いたときには柳田先生も嬉べば、石井などは大きな圖體をして小供のやうに踊り上つて嬉んで呉れた。併しそのなかで一番嬉んだのは清香であつた。

秋の新學期には清香もひとしほ張合ひが出て新しく買入れる本の世話から、着物の世話ま



で一切引受けてしてやつた。そしてその頃旦那の辻倉は商用で始終京阪地方から九州の方を旅行して歩いてゐたので、清香はその都度お伴を仰せつかる。しばしの間でも敬次郎に別れるのは辛かつたが、しかしこればかりは何うにもならなかつた。それ故、九月から十月へかけては清香は思ふやうに敬次郎にも逢へないやうな仕儀になつてしまつた。それでも彼女は旅先から旦那の眼を忍んで、手紙を呉れたり、爲替を送つて呉れたりした。

敬次郎はその頃にはもう學校の方のことで一心になつてゐた。何を云つてももうあと一年の辛抱である。時々故郷にゐる父のことや、家の有様などを思ひ出すこともあつたが、併しもうかうなつてはどうする譯にもいかなかつた。父の宗左衛門からはその後も相變らず何とも消息はなかつたが、併し田口からの通信などに依ると彼は依然として達者で、松本の花柳界を荒して廻つてゐるらしかつた。敬次郎はいづれ學校を卒業したら、何とか方法を講じて、父との間の問題を解決しようと思つてゐた。

敬次郎ももう此頃ではあの喜久子のこととあんまり思ひ出さなかつた。と云つて、今でも

決して忘れたといふのではない。便りはなし、消息も分らないとなると、いかに思ひ詰めた喜久子のことでもさう始終心の底に秘めては置かれぬのが人情である。亡きお春の思ひ出が漸次と薄らいでゆくやうに、喜久子のことと日が経ち、月が過ぎるにつれて、次第々々に記憶の色が褪めてゆくのは事實であつた。

さうかうしてゐるうちに戸外では、又寒い木枯らしが吹き初めて、木の葉の散り迷ふ秋もいつかしら末になつていつた。故郷を離れてから一年の月日は夢のやうに過ぎてしまつたのである。ふと月のい、晩などにはあの松本の町を後に見捨て、東京へやつて来た夜のことと思ひ出される。それと一緒に行方の知れぬ喜久子のことと又再び敬次郎の心に歸つてくるのであつた。

#### 九十四

一度喜久子のことを思ひ出すともう際限がなかつた。蒼白い月光の射し込む窓で本を讀ん



でゐる時などにふつと思ひ出すと、心はそれからそれへと奪はれてゆく。あゝ、それにしても今頃は何處にどうしてゐるであらう。何處の國で此の月を見てゐるであらう。さう思ふと敬次郎にはあの喜久子が廣い世界の何處かの果てにこの月をみてるると云ふことが耐まらなく苦痛になつて來るのであつた。もう過ぎ去つてしまつた人のこと故或時は清香にも物語つて聞かせようと思ふこともあつたが、彼にはそれさへ辛くて出来なかつた。

秋が暮れて、漸々と冬近くなるにつれて敬次郎は又妙に喜久子のことばかり思ひ暮すやうになつていつた。

清香は清香でまた、辻倉が此頃ではもう彼女を眼のなかへ入れるやうに可愛がつてくれるので、つひ敬次郎との逢瀬も妨げられる。さうなると思ひが募るのは人情で、十日も二十日も玉を買はれてまるで落籍されたやうに稼業も休んで、家でごろごろしてゐると思ひ出すのは敬次郎のことばかりであつた。その揚句が無理をしてやも敬次郎を呼び出すことになる。晝間はそれでも人目があるので、呼び出しの、るのは大抵いつも夜更けであつた。旦那は

家を明けない人なので、それを歸したあとで清香は君の家へいつてしつぱりと敬次郎に逢ふのを樂みにした。時候が寒くなればなるほど逢瀬はしけくなつて、しまひには少くとも一週間に三度は逢ふやうな事になつていつた。

敬次郎は學校の方は忙しいし、それに晩遅く家を出るのは先生の手前まことに拙いので、三度に一度は斷るやうにしてゐるが、さうなると、その次に逢ふときの恨み辛みが恐ろしかつた。清香は旦那が出來たからそれで水臭くなつたんだらうの、もう自分に飽きて來たのだらうのと云つて、泣いて敬次郎を責める。それが辛さに敬次郎は都合の出來る時には何とかして君の家へいつた。さうさう散歩に行くの、石井のところへ行くのと云つて出られもしないので、故郷から人が訪ねて來たとか、教授のところへ質疑に行くとか、いろんな嘘を吐いて家を出た。或時などは圖書館へ通ふといつて、ちやんと袴を穿いて、ノートやインキ壘まで持つて家を出たこともあつた。陰では先生に對して濟まないとは思つてゐながら彼はもうどうすることも出來ないのであつた。



或日のこと彼は久振りて石井の下宿へ遊びにいつた。それまでにも大概月に二三度は逢ふならひになつてゐるが、その時には丁度懸け違つて彼はもう三週間ほども石井に逢はないのであつた。

石井はいつものとほり部屋の方の窓際へ電燈をひつぱつていつて、そこで一生懸命になつて字の細かい獨逸書を讀んでゐた。敬次郎が、

『や、しばらく。』と、云ひながら入つて來るのをみると、石井はにつこり笑つて、

『おう、安井か。随分しばらく會はんなあ。』と云つて、さも懐しさうにその顔をみながら、

『まあ、この火鉢の傍へ寄れよ。馬鹿に寒くなつたぢやないか。』と、いふ。

敬次郎も火鉢の傍へいつて坐りながら、

『さぞ忙しいだらう。僕も是非一度來ようと思つてゐるが、又邪魔をすると可かんと思つてな。』

『いや、卒業試験となるとこれで矢張り馬鹿に出來んからなあ。今の社會制度ぢや何を云つ

ても成績の順かよくないと、いくら學士になつても通用せんからなあ。は、は、は、』と、笑

ふ。石井はもうこの十二月で目出度學士號の得られる身分なのであつた。

敬次郎は何んだか、今石井が卒業試験の勉強をしてゐるといふことが羨ましくて耐まらなかつた。

## 九十五

石井は火鉢へ不器用な手つきで炭をつぎながら、

『ときに、安井。君は俺の葉書を讀んでやつて來たんだらうなあ。』と、つかぬことを云ひ出す。

敬次郎は怪訝な顔をして、

『え、葉書？いや、僕はそんなものは受取らんよ。いつ出したんだ？』と、いふ。

『ぢやまだ見んのか。可怪しいな。俺は今朝出したんだがなあ。』と、云つて、小首を傾けな



から、『いや、見ないんならそれでいい。實は俺は今明日のうちに君に逢ひ度いと思つとつたんだ。まあ、何しろ来て呉れさへすりやい、のだ。』

敬次郎は氣懸りになるので、

『葉書を呉れたつて、何か急な用なのか？』と、訊き返したが、石井は笑顔をみせながら、『いや、大して急な用といふんでもないが、實は少し柳田先生から頼まれたとがあるもんだから。』と、云つて、眞面に敬次郎の顔を見詰めながら、『いや、君と俺の仲だ。何もさう持つて廻つた物の云ひ方をする必要もなからう。兎に角書生流にあけすけに話してしまはふなあ。』と、云つて、石井は又笑ひ出した。

敬次郎は何んだかそれが氣になつてならなかつた。

石井はやがて茶を入ながら、

『おい、安井。先生からの頼みといふのは別のことぢやないが、貴様は此頃よく晩に家を明けるさうだなあ。なんでも俺のとろへ遊びにいくといつて出懸けるさうだが、それにしち

やあんまり俺のところへ御無沙汰しすぎるぞ。は、は、は、そんなとを云つて貴様、ちよこちよこ何かやつとるんぢやないか。いかなぜ、おい。』と、彼は滑稽けた顔つきをして、眞面に笑ひながら敬次郎の方をみて、『それで先生は何んだか、ひどく貴様のことを心配してゐられるのだ。實は昨日研究室で先生に逢つたら、丁度俺とたつた二人つきりだつたもんだから、その事が話に出て、先生は俺の口からそれとなく貴様に忠告しろといふんだ。貴様は今が一番大事な時だから、どうかして軌條から脱線させ度くないと云つて、そりや貴様に對しては誠實な心持をもつてゐられるのだ。』と、いふ。

敬次郎は思はず首を垂れて、

『いや、併し僕は決して夜出たつて何もするのぢやない。此頃は勉強してゐるとちよきに頭腦が疲れて来るもんだから戸外へ散歩に行くのだ。殆んど毎晩のやうに出るから僕も先生に云ひ出し憎くなつて、つひ君の名を利用したりするんだ。』と、云ふ。

石井は大きく笑ひながら、



『おい、安井。貴様俺まで誑かすのは止せよ。は、は、は、それこそ頭隠して尻隠さずだ。ちやんと此方には證據が上つとるんだからあんまりへまな辯解をして自分で自分の腹を切るなよ。は、は、は。』

『證據つてどんなことだ。僕には何も覺えがないんだから。……。』

『は、は、は。嘘を吐け。貴様がいくら隠しても先生の家の料理番の親爺がすつかり貴様の尻尾を抑へてゐるんだ。貴様は夜遅く歸つてくる時には必ず酒臭い息を吐いてるといふぢやないか。』

『そりやたつた二度か三度の話さ。』

『笑談云ふな。ぢやもうちつといぢめてやらうか。なんでも貴様のところへは女の字で手紙を寄越したり、俵を迎へによこしたりする者があるつて云ふぢやないか。それでも貴様は知らんといふのか。は、は、は。もうい、加減に甲を脱げよ。俺と貴様の仲ぢやないか。貴様は俺に隠しとるんだらう。あの喜久子がまた東京へ歸つて來たんで、貴様はそれに逢つとる

んだらう。どうだ、俺の眼は黒からう。は、は、は。』と彼は圖星をさしたやうに腹を揺りあげて笑つた。

### 九十六

敬次郎は喜久子の名を云はれると寧ろ意外な氣がした。成程さう云はれてみれば、この石井は清香のことに就いては何も知らないのである。ひよつとしたら田口から何か云つて寄越しはしまいかと、敬次郎も薄々心配はしてゐたが、石井が今更ら喜久子のことを云ひ出すやうではそれも唯だの杞憂に過ぎなかつたと思つて、彼はほつとしたのであつた。彼はやがて眞顔になりながら、

『石井君。笑談を云つちや可かんよ。あの喜久子のごことは君もよく知つとるんぢやないか。東北地方へ賣られていつたきり、あれからはもう何の便りもないのだ。その話は君にも打明けてしたぢやないか。』と、いふ。



石井は探るやうな眼眸をして、にや／＼笑ひながら、

『そりや東北地方へ賣られていつたのは事實だらうが、併し汽車がある以上は又東京へ歸つて來んものとは限らんからなあ。いや、安井、ほんとに俺にまで隠すのは水臭いぢやないか俺は決して貴様にあの喜久子を捨て、しまへの、別れてしまへのと野暮なことは云はん。柳田先生だつてさうだ。唯俺達の心配するのは貴様の身持だ。貴様だつて今貴様自身の位地がどれほど重要なものであるかといふことはよく知つとるだらう。』

敬次郎は首を垂れて、

『いや、さう云はれると僕は一言もないのだ。全くあんなに夜出歩いたりしたのは僕が悪かつた。』と云つて、俄に感傷的な心持になりながら、この石井にだけはあの清香のことを打明けて語つてしまはふかと思つた、實際考へてみると、學校へ通つてゐる體としては餘りに放埒であつた。いかに清香がやいやい云ふからと云つて、彼は此頃では少し清香に逢ひすぎると思つた。この石井は口の堅い男であるから、いつそ清香のことを打明けて、もし自分が或

程度以上にあの女に惑溺してゆくやうなことがあつたら、その時には局外者として監視してゐて貰つて、充分忠告もして貰へば又反省もさせて貰はふと思つた。しかしいざとなると何んだかひどく氣恥かしくなつて彼はどうしても清香の名が口に出せなかつた。それに又もし説明のしようが拙いと、いろいろ石井の誤解を買ふ恐れもあるし、彼に却つて心配をさせる恐れもあるので敬次郎は到頭その場では口をつぐんでしまつた。

石井は敬次郎が何と辯解しても、喜久子が東京へ歸つてゐるものと固く信じてゐるやうに彼はそつちの問題にはなるべく手を觸れないやうにして、頻りに身持ちを堅くしろといふことばかり口を酸くして繰返してゐた。

『貴様は俺に云はせると、頭もい、し、可成理性も發達しとると思ふから、俺がかういふのは或は老婆心かも知れん。しかし全く人間は學生時代が尊いのだ。それと同時に今が一番迷ひ易い時だ。俺は感情のために理性を壓倒されることが一番恐ろしいのだ。そりや酒を飲むのもよからう。女をこしらへるのも決して可かんと云はん。併しさうなつて來ると、問題



は貴様自身の操守といふ點になつて来る。どんな際どい綱渡りのやうな生活をしようとつても、心のしつかりした奴は決して綱から落ちるもんぢやない。いくら危険に瀕してもきつと冷たい理智の力で難關を切り抜けてゆく。俺は貴様にそれを望むのだ。もう出来上つたことは仕方がない。今更止めろといつたつて、若い貴様の胸の血はおさまるまい。唯溺れるなよ。なあ、おい安井、い、か、きつと溺れるなよ。それだけは俺の前できつと誓へ。』と、石井はいつもの磊落な調子で云ふ。

敬次郎は首を垂れて黙つてゐた。石井の云ふことはびしびしと胸に當つて、その溺れるなといふ言葉が今の場合自分には最も重大な意味をもつた標語のやうに聞えてくる。彼は首垂れたまゝ、双眼に涙を流してゐた。

敬次郎は石井に告げられて、もう夜遅くなつてからやつと對芳館を出た。戸外へ出

てみると、その晩は月はなかつたが、眞蒼な星が數限りもなく瞬いて、天心を掠めてゆく。一片の雲がまるで幻のやうにみえてゐた。町の軒燈も洗ひ出されたやうにくつきりと冴えて、とある四辻を曲ると、寒い寒い東北風が颯と砂塵と一緒に吹きつけて來た。

敬次郎は何となく身を引絞られるやうな心持ちになつてゐた。石井に云はれたことが一も二もなく胸にしみると同時に、何んとかく自我といふやうな若々しい誇が根強く胸底から湧いて來る。じつと自分で自分の姿を眺めてみると、彼は云ひ甲斐もなく情なくなつてくる。あ、何んといふみぢめな、意氣地のない我が姿だらう。獨立獨行で、立派に苦學をするつもりで都會へ出て來てゐるながら、境遇の安易さを願つて意氣地もなく他人の家の食客となつて、而も女に養はれてゐる今の身である。何のために自分は志を立て、家出をして來たのであらう。この手、この足で自分は立派に身を養ひ、身を苦しめて、他日の華々しい成功を期してゐたのではないか。それに今の態はなんだ。その卑屈な賤しい態度はどうだ。さう思ふと敬次郎は我れとわが背に咎ち度いやうな切ない心持ちになつて來た。



敬次郎は我知らず歩いて来るうちに、いつの間にか本郷の三丁目の四辻まで来てゐた。ほの暗い電柱のうへに點つた灯影を、寒い寒い木枯らしの風が横なぐりに吹いて通るのをみると彼は耐らなく寂しく、頼りなくなつて来た。せめてこんな晩に清香にでも逢つたらと思ふともう矢も楯も耐らなくなつて来た。つひ今しがたまでは自分の身に愛想を盡かすほど眞面目な氣になつてゐたのが、僅か二十分も経たないうちにもうそんな心持ちに落ちてゆくほど彼は心弱くなつてゐるのであつた。心弱いといふよりも、それほど清香といふものが彼の心に深く喰ひ入つてゐるのであつた。

敬次郎はやがて思ひ切つて湯島の方へ足早に曲つていつた。今夜こそ清香に逢つて、もう此れからは餘り繁々逢ふまいとそれを云つてやらう。そんな果敢ない口實をつけて、彼は湯島の切通阪を下りていつた。

君の家へ来てみると、いつものお隆といふ姐さんが出て来て、

『あら、若旦那。被來いまし。』と云つてにこ／＼笑ひながら『まあ残念でしたわねえ。つひ

今しがた清ちゃんか歸つていつたとこなんですよ。今夜はねえ又レコが来てゐるんで、今しがた家から迎ひに來ましたのよ。それでも此れから後を追つかけたら追ひつくかも知れない。おい、お久さん。お前さん、一寸清香さんの後を追つかけてみてお呉れな。』と、勝手の方へ聲をかける。

勝手では小婢の聲が、

『はい。』と、答へて、やがて石敷きの路次をかたこと、小刻みに下駄の音が驅けてゆく。

お隆は敬次郎に是非上れといつたが、清香も旦那が來てゐるのなら到底今夜はゆつくりしてゐられまいと思つたので、彼はそのまゝ、又戸外の往來へ出てみた。そして少時そこに立ちつくしてゐるとやがてほんのりとした軒燈の闇に棲をとつた島田の姿が繪のやうに浮き上つて清香が小婢のお久に連れられて此方へ歸つて來る。

清香は敬次郎の姿をみると、小走りに寄つて來ながら、

『あら、まあ、若旦那。よく被來つて下すつたわねえ。私、今夜は何んだか不意にお眼にか



かれさうな気がしてゐたんですよ。』と、云つて、思ひ懸けなく逢へたのが、さぞ嬉れしさうににこにこ笑ひながら、『さあ、そんなところへ立つて被居らないで、家のなかへお入んなさいよ。寒いぢやないの。……』

### 九十八

敬次郎はさう云はれるともぢもぢして、

『いや、今日はもう何んだから上るまい。君も今夜は辻倉さんが來てるんだつて云ふぢやないか。一寸話をすりや用は濟むんだからそこいらまで一緒に歩かうぢやないか。』と、いふ。清香は袂をとつたま、嬌態をして、

『あら、此處まで來て上らないなんて随分ねえ。私十一時半になりや旦那がお歸んなすつちまふから、さうしたらすぐに歸つて來ますわ。それまで此家で一杯飲んで待つてゐて下さいましな。』と、甘へるやうに云ふ。

敬次郎は餘程さうしようかと思つたが、併しやつと我を押へて、

『いや、もう今夜は遅くなると困るから上るのは止さう。それよりもどうせ君は江戸家の方へいくんだらうから、そこまで送つていかう。』と、云ふ。

清香はいくら止めても敬次郎がうんと云はないので、やがて仕方がなしにぶらぶら肩を並べて歩き出した。池の端の通をかうして二人で歩いてゐては人目に立つし、それに箱屋にでも見付るかと思つた五月蠅いからといふので、清香は石橋を渡つて池畔の廣場の方へ入つていつた。廣場へ出ると、池の面から吹き上げてくる風が頬を割くやうであつた。池の面には薄白い漣が一面に動いて、枯れ朽ちた蓮の葉が黒く痣のやうになつて浮んでゐる間に、大空の星がきらりきらりと映つてゐる。辨天島には招福亭の灯影が水郷の夜を思はせるやうにしんみの風に洗ひ出されて、公園の白熱瓦斯の街燈は物凄くほご蒼く冴えてゐた。

清香はいきなり敬次郎の手を握つて、

『お、冷たいこと。ほんとに此頃は滅切り寒くなりましたわねえ。』と、云つて、眞暗な、



かなので肩と肩とを摺り寄せながら、『ねえ貴方。用つて何あに？貴方何か私に厭なことでも仰有りに被來つたんぢやないでせうねえ』と、何か氣になるらしく云ふ。

敬次郎は少時の間黙つてゐたがやがて聲を低くして、

『清香さん。』と、呼ぶ。

清香は握つた手を強く自分の方へ引き寄せながら、

『あら、清香さんだなんて厭ですわ。そんなに改まつて、水臭いぢやないの。私にはお初といふ名があるんぢやありませんか。何故お初つて呼んで下さらないの、ねえ。貴方。貴方そんなことを仰有つて、又私を泣かせるやうなことを云ふんぢやないの。私厭ですわ。私、今夜そんなお話を聞くのは厭ですわ。』と、小供のやうに肩を揺りながら云ふ。

敬次郎はそつと清香の顔をみて

『いや、君。まあ、待つて呉れ。實はお察しのとほり、今夜は僕、一寸君に云ひ度いことがあつてやつて來たんだ。そりや他でもないが、……。』と、云ひ澀んで、又清香の顔を横か

らみながら、『そりや他のことでもないが、實はあの、僕少し事情があつて、此れからは今迄のやうに君にも繁々逢へなくなるだらうと思ふんだ……。』

清香はそれを皆まで云はせずに、

『あら、まあ、どうして？どうしてそんなことになりますの？』と、しつかり手を握りしめながら此方を振向く。

敬次郎は顔を背けて、

『いや、詳しい話をすりや實は此頃僕があんまり夜遊びをするといふんで、今日先生から石井を通して懇々忠告を受けたんだ。尤も先生の方ぢや君といふものがあつてかうして何不自由もなく、君の手で萬事をやつて貰つてゐるとは知らないんだ。僕が或女に引懸かつて、それで放埒をやつてゐるんだと思つて、ひどく心配して下すつてゐるんだ。』と、呟やくやうな聲で云ふ。



清香はその話をきくと急に恐れ返つて、

『ねえ、若旦那、或女つて誰れですの？』と、訊く。

敬次郎はふつと云ひ遊つて、

『うむ、それは、あの、……』云ふのを、清香は疊みかけて、

『ちや若旦那。貴方は、貴方は私の他にも、……』と、云ひかけて急に泣き聲になつて、

『ほんとに随分ですわ……』と肩を揺る。

敬次郎はひよつとして清香の誤解を買つてはと思つたので。その時になつて初めて喜久子  
のことをすつかり彼女に物語つてしまつた。松本の八幡宮の小屋へか、つてゐた時分のこと  
から、ふつと汽車中で逢つたこと、それから悪い奴の手に捕へらなつて東北の方へ賣られてい  
つたことまですつかり語つてしまつた。そして涙ぐんだ聲になりながら、

『實はその喜久子が東北へ賣られていく前に僕のところへ訪ねて来たことがあるんだ。それ  
に何を云つたつて石井の下宿に厄介になつてゐたんだから、こればかりは隠さうたつて隠さ  
れやしないんだ。それを先生や石井は一年たつた今日でもまだ胸に置いてゐるんでひよつと  
したらその喜久子が又東京へ遁けて歸りでもして、僕がそれに引懸つてゐるんだと思つてゐ  
るのさ。』といふ。

清香はじいつと敬次郎の方をみて、

『そりや先生や石井さんがお疑ひになるばかりぢやありませんわ、私だつて變に思ひますわ  
ひよつとしたらその喜久子さんとかいふ人が東京へ歸つて來てゐるんぢやないんですの』と  
激しい嫉妬をみせながら云ふ。

敬次郎は困つたやうに、

『どうも君までがそんなことを云ひ出しちや困るぢやないか。君とはかうして殆んど三日と  
あけず逢つてゐるんだもの。大概分りさうなもんぢやないか。』



『でも私、心配ですわ。ねえ、貴方、そんなことを云つてゐて、貴方は私にまで嘘をお吐きになるんぢありませんか。そんなことをなすつたら私ほんとにどんなことをするか分りませんよ。ようござんすか。』と、云つて、敬次郎の脊なかへ手をかけながら、『どうもお話の様子でみると貴方はその喜久子さんとかいふ人に惚れて被居るやうねえ。きつとさうよ。』と、搜りを入れるやうに云ふ。

敬次郎は顔を背けて、

『笑談云つちや可けない。僕は喜久子に惚れるほど深くつきあひもしないし、……まあ誰れにしたつて考へてみりや可哀想ぢやないか。若い身空で、悪い人間の手から手へ渡つて、死ぬやうな苦勞をしてゐるんだ。僕はそれが氣の毒で、どうかして助けてやり度くて耐らななんだ。』

清香も身につまされるやうな顔をして、

『さう云やあ、ほんとに可哀想な人ですわねえ。でも、若旦那。……』

と、云ひかけて彼女は何かしら胸が晴れないやうに、『あ、私や又ひとつ心配事が増えて來ましたわ。』

そんな話をしながら歩いてゐるうちに、二人はいつの間にか博覽會跡のところまで來てしまつた。大きな建物は倒れかゝるやうに夜の空に聳えたつて、池の端の町の火がもう小さくなつてしまつた。

敬次郎はあんまり時間が遅くなるので、又辻倉の方を失策りでもしてはと懸念をしてそろそろ歸らうと云ひ出した。清香は黙つて後から隨つて來たが、やがてしんみりした聲で、

『若旦那、私ほんとに今夜このまゝでお別れするのは厭ですわ。私なんだかその喜久子さんとか云ふ人のことが氣になつて耐らないんです。かうして考へても、その人の顔が眼にみえるやうですわ。ほんとに若旦那。私は何うなるんでせうねえ。』と、いつて、袖口を引出して頬に流れ出る涙を拭いた。



又もとの池の端の通りまで歸つて來る間、清香は泣きつ口説きつしながら、喜久子のこと  
で、敬次郎を責めた。そして君の家の前までくると彼女は敬次郎の袂を控へて。もう夜も更  
けたことのゑ、たつた一時間半か二時間のところだから君の家へ上つて待つてゐてくれと云  
つて聞かなかつた。

敬次郎は何んだかその晩は無上に先生のことか氣になるので、到頭それを振り切つて、

『いや、僕は今夜はどうあつても歸るよ。先生から忠告を受けたその晩にまさか遅くも歸れ  
んぢやないか。全くかうなると他人の家の飯をたべてゐる食客風情の情なさかしみじみ分る  
ねえ。』と、胸の底から溢れ出るやうな調子で云ふ。

清香は自棄な聲になつて。

『ほんとうにねえ。もうそんなしみつたれな食客なんか止めておしまひなさいよ。私も今夜

伺つた話ですつかり心配になつてしまひましたわ。貴方が始終顔の見れるやうな處にゐて下  
さらないぢや私ほんとに苦勞になつて仕様がなからどうかして私の手で何處かへ下宿でも  
させて上げるやうにし度いわねえ。私ももう近いうちにそれぐらゐなお金も廻るやうになり  
ますから、ほんとにもう少しの辛抱ですわ。』といふ。そしてひどく名残り惜しさうにしてゐ  
たが、敬次郎に火のつくやうに云はれて、やつとしほしほと江戸家の方へ足を向けた。

敬次郎はあとから追ひ縋るやうに聲をかけて、

『ぢや君、僕は當分もう逢はないよ。君ももう迎ひなんか決して寄越さないやうにして呉  
れ。それぢや御機嫌よう。』

清香はそれを聞くと、冴えた下駄の音をかたこと、刻みながら又歸つて來て、

『あら、貴方、厭ですわ、そんな心細いことを云つちや。それぢやまるで別れるやうな臺白  
ぢやないの。私悲しくなつてしまひますわ。どうか貴方、今夜のところだけ氣をよく別れさ  
せて下さいました。』と、云ふ。軒燈のぼんやりした光にすかしてみると、清香は双眼に一抔



涙を漉へてゐた。

敬次郎はさすがに可哀想になつて、

『ちやまた十日ばかりのうちに逢ひにくるよ。それまでのお別れにして置かう。』と、態とにつこり微笑みながら云ふ。

清香は涙を拭かうともしずに、

『十日？随分長いわねえ。私そんなに待つてゐられるか知ら。』と小首を傾けて、『ちやもう無理は云ひませんわ。きつと十日目の日に被來つて下さいませよ。』と、云つてやつと又別れてゆく。

『ちや左様なら。』

『左様なら。』

その聲は夜風の底にしんみりとひゞいていつた。

たつたひとりになると敬次郎は無上に寂しくなつて、ぶらぶら電車の停留場の方へ歩いて

いつた。考へてみれば實に不思議な二人の仲である。もうかうなつては到底一生別れることが出来ないやうな氣がしてならない。あの清香の心では別れるなぞといつたら、それこそ死んでしまふであらう。それを思ふと敬次郎には餘りに激しい女の思ひがひどく恐ろしくなつて來た。

家へ歸つてみると、その晩は先生も何處かの宴會へ出られたといつて、留守であつた。書齋の窓に灯影が暗く消え落ちてゐるのをみると、敬次郎はほつとした。そのまゝ、彼は自分の室へ入つていつたが、その時料理番の親爺は二階からふらりと降りて來て、

『安井さん。お二階の戸締りは私がすつかりして置きましたよ。』と云つて、足音を忍びながら臺所の方へ入つていつてしまつた。

敬次郎は大きな聲で禮を云つてやがてノートの整理にかゝつた。



それから少時たつて、柳田先生の家では或忘はしい事件が起つた。それは他でもない。先生が大學へ講義に行つた留守の間に、何者か先生の研究室へ忍び込んで、そこにある高價な白金の坩堝を盗んだのであつた。それは時價にしてどうしても三百圓以上の品物で、先生が獨逸へ留學してゐる時分を買ひ購め、今に愛藏してゐるものであつた。

その日は敬次郎も講師が二人ほど休講したので、午後になるとすぐ家へ歸つて來てゐた。

そしてその日の科目の参考書を引出して、半日一生懸命になつて勉強してゐたが、そのなかにもどうしても百科辭典をひかなければならない項目があつた。平生から二階の圖書室へ入ることは先生から許されてゐたので、敬次郎は何の氣なしにそこへ入つて、小半時ほど大きな本を膝のうへ、おろして調べてゐた。その時には研究室の方では何の變りもなかつた。

一體が研究室はごたごたしてゐて、専門家以外の素人には何が何やらさつぱり分らないので、先生に命令されて掃除の手傳ひをしたり、卓子の置換へをやつたりする以外には敬次郎も滅多にそこへは入らなかつた。實驗のある時には石井が來たり、その外先生の門下の學生

がきたりして、一切のことはその人達がやつた。それ故、敬次郎はその白金の坩堝などは何處に置いてあるかさへ知らなかつた。

午後の五時頃になつて先生が大學から歸つて來ると間もなく、二階の書齋からは呼鈴の音が消魂しく鳴り響いてきた。

敬次郎は讀みかけてゐた本をそのままにして置いて、すぐさま書齋へ上つていつた。と、その時先生は自分でハウスロックに着換へて、實驗室の入口のところへ突立つてゐたが、敬次郎の顔をみると、氣難かしさうな眼色をして、

『おい、安井。お前は今日この實驗室へ入りやせんか。』と、訊く。

敬次郎は覺えのないことなので、

『い、え、私入りや致しません。』と、答へたが先生はその顔をきつと見据ゑながら、

『お前は今日早稻田から何時に歸つて來た?』と、云ふ。

敬次郎は怪訝な顔になつて、



「は、あの午後一時前に歸つて参りましたが、……」と、云つて、仕方がなしに先生の顔を見返してゐた。

先生は少時考へたあとで、

「ちやお前が入らんのなら、お前以外の者で誰かこゝへ入つたものがあるだらう。お前は知らんかね？」

「は、私は歸つてまゐりましてからずっと部屋に居りましたが、別に誰も上つたやうな様子も御座いませんでしたが、……」と、云つて、敬次郎は調子を變へながら、

「先生、一體何うしたんで御座います。何か失くなりでも致しましたんですか。」と、訊いてみた。

と、先生は又その顔を見返して、重々しい聲で、

「いや、實はその卓子のうへに載せて置いた白金の坩堝がなくなつてしまつたのだ。それに試験管なども大分位置が變つたりしとるから、きつと誰れか此處へ入つて来て、持つてい

つたものがあるに相違ない。」

敬次郎は悸乎として、

「えッ、白金の坩堝が？、そりや可かんですなあ、何うしたんでせう。」

「いや、實に不思議だ。外から盗人が入つてくる譯はないし、それに坩堝だから多少そつちの方の知識があつて、そんなもの、價値の分る奴でなければ持つていく譯はないんだ。實に可憎しい。……」と、云ひながら、實驗室のなかへ歸つて、窓の戸をがたつかせて見たり方々の抽出しをあけてみたりする。

## 百二

敬次郎は自分の身には何の覺えもないことなので、そのまゝ、實驗室のなかに入つていきながら、

「先生、その坩堝は何處に置いて御座いましたらう。」と訊くと、先生は顎で實驗室のうへを



指しながら、

『その上に置いてあつたんだ。今朝出る時にはちやんとあつたのだから、どうしたつて俺が出てからあとで失つたに相違ない。實に不思議だ。』

『でも、先生、この室にはいつも鍵がか、つてゐるんぢやございませんか。それになくなるのは變ですな。』

『いや、今日は時間が少し遅れたんで大學へ出るのを急いでもんだから、實は鍵をかふのを忘れたんだ。それが俺の失策だつた。併しそれにしても、あの埧塙は獨逸のフライエル會社の製品で、金めは兎に角、今では容易に得られん代物なのだ。實に惜しいことをしたなあ。』  
先生はさう云ひながら實驗臺のうへや、方々の抽出しなぞを開けてしらべてゐるが、段々調べてみると、埧塙の他にも貴金屬で作られた灼熱器などが二三品ほど見えなくなつてゐる。先生はそれを発見するとひどく顔色を動かして、不思議だ、不思議だと云ひつゞけながら室内をうろろしてゐた。そして、特にさう云つた高價なものばかり盜まれたところをみると

少くとも器械の價値を知つてゐるもの、仕業に相違ないと云つた。

敬次郎が學校へいつてゐる留守の間には料理番の杉谷がたつたひとりで留守居をしてゐるので、やがて先生は呼鈴を鳴らしてその杉谷も二階へ呼び上げた。

杉谷の老爺は戸外で何かしてゐたとみえて、鼻の先を眞紅にしながらもぞりと上つて來たが、先生から埧塙のことを云はれると、急にきよそきよそした態度になつて、

『えッ埧塙がなくなりました？私はその様なものを見たことも御座いませんが、一體どうしたといふんでございませう。外から盜賊の入つて來たやうな様子もないしなにしろ晝間のうちのこととござんすからなあ。私やいつも旦那様が仰有るとほりお玄關の戸へ鍵をかけて、しつかりお留守番をしてゐますんですから、滅多に間違ひはない筈でござんすがなあ。』と、頻りに頭を振つてみせる。眞正直な男なので、その顔には濟まないといふやうな稍慌てた不安の色をみせてゐる。

先生は黙つてその顔をみて、



『それぢやお前も此處へは上つて來んのだな。』と、訊く。

杉谷は恐縮したやうに揉み手をして、

『い、え。どう致しまして、私はお二階で御用のある時の外は一切上りや致しません。』と、云つて、少時考へたあとで、今度はじろりと敬次郎の方を見ながら、『あ、さう云へば安井さん。貴方は先刻二階へ上つて、何かごとごととして被居つたぢやありませんか。』と、いふ。

場合が場合なので、敬次郎は我にもなくぼつと顔を染めながら、

『いや、先刻は僕圖書室まで上つたけなんだ。』と、云つて、先生の方をみながら、『あの、私いつも先生からお許しを受けて居りますので、實は先刻一寸百科辭典を拜見させて頂きに上つたのです。その時には無論此處へは入りも致しませんし、又別に變つたこともないと思つて居りましたが、……』と、一生懸命になつて辯解するやうな態度になりながら云ふ。

先生は黙つてきつとした瞳を据ゑながら二人の顔を交互にみてるた。約三分間はかりの間不思議な沈黙が続いた。そのあとで先生は重々しい聲で、

『まあ、い、。兎に角一應調べてみたくへで届けるなり何んなりするから、お前達はもう階下へ行つとつてい、。』と、云つて、ふいと傍を向いてしまつた。

二人はやがてすすすご階下へ降りていつた。

百三

その晩もう八時過ぎになつてからふいと石井が先生の家へやつて來た。敬次郎は玄關へ取次ぎに出たが、石井は例のこにこした態度で、

『は、、、。態々お取次ぎで御苦勞。俺だよ。』と、笑ひながらぬうツと玄關の石敷のところへ突立つてるる。

敬次郎はい、ところへ來て呉れたと思つて、早速自分の部屋へ導き入れて、先刻からおちおちしてゐられないほど氣になつてゐる垣塙の話をしようと思ふと、石井はそのま、つかつか階段を登りかけて、



「おい、安井。俺は貴様の部屋へゆく前に一寸先生に逢つて来るぞ。實は病理學の問題で今日は朝からすつかり参つてゐるのだ。今頃先生に聞きに来るなんぞは實に卑怯千萬だが、併しこの問題の解決がつかんと、又一年ふいにしてしまふからなあ。は、は、は、」大きな聲で笑ひながら彼はそのまま、二階の先生の書齋へ上つていつてしまった。

敬次郎は仕方がなしに自分の部屋へ歸つて、そこでじいつと坐つて石井が降りて来るのを待つてゐた。さうしてゐるうちにも敬次郎の頭にはさまざまの疑念が先々と湧いてくる。先刻の先生の顔つきではどうしても先生は自分に疑ひをかけてゐるやうな氣がしてならない。あの埧塙やその他のものを盗んだのは多少でも器械の價値を知つてゐるもの、所業だなどと云はれた口の裏には何か隠されてゐる。それに又自分が何の氣なしに百科辭典をひき上つたことも先生には變に誤解されてゐるかも知れない。而もそれを自分自身の口から云はずに杉谷に云はれたやけに、氣になつて耐らない。

それにしてもあの埧塙はどうしたのであらう。この高い洋館建の二階であるから白晝まさ

か盜賊が外から入つて来る譯はない。さうすると家に入つたのはあの杉谷と自分であるから疑ひは自然二人のうへにかゝつて來なければならぬ筈である。

敬次郎は杉谷のことを考へてみた。料理番などをしてゐながらその實彼は好々爺で、正直一途の人間なのである。金も欲しがらなければ、その他に何といつて慾心のありさうな様子もみえぬ。唯主人に對して忠實な一個の老僕として仕へてゐる男なのである。前生はホテルのコックなぞもしたことがあると云つてゐるが、何の係累もなく、生活の煩ひもない彼が今になつて盗みをするやうとも思はれぬ。たとへ如何なる數奇な生涯を送つて來たにもせよ、あの律氣者のことであるからとてもそんな盗みなどをする勇氣がある譯がない。それに又先生が歐羅巴から歸つて來られるとすぐに雇はれて、もう三年近い歳月をこの家で送つてゐるのである。先生もひどく信用してゐれば、又彼の方でも先生を二つとないものに思つてゐるのである。

さう考へて來ると、敬次郎は太い繩で身を縛られるやうな氣がして來た。どうしてもこの



不思議な盗難事件の疑ひは自分ひとりにか、つて来なければならぬ。もしそんな嫌疑を受けたら自分はどうしよう。どうでも云ひ解く道はあるとしても、一時なりともそんな汚名を被るのが彼にはひどく厭であつた。それにしても一刻も早く石井が降りて来てくれ、ばい、がと思つて、彼は幾度かそつと足音を忍んで廊下へ出てみたが、二階ではこそりとも人聲さへ聞えない。何か話が込み入つてゐるとみえて、石井はなかなか降りて来さうな氣勢もなかつた。

時が過ぎれば過ぎるほど敬次郎は益々不安になつていつた。ひよつとしたら先生と石井とは何か自分のことに就いて話してゐるのではあるまいか。さう思ふ矢先に二階のところではごとりと不思議な物音がして来た。

#### 百四

敬次郎はその物音をきくと、きつと石井が降りて来たのだらうと思つて、部屋の扉を細め

に開けてそつと覗いてみた。と、薄暗い燈のともつた階段の中間のところには眞黒な黒影が大きく斜に倒れてゐる。どうみても誰れかそこへ立つて、二階の様子を窺つてゐる氣勢である。

扉の開いた物音で、その黒影はひどく慌たしい様子でばたばたと階段を降りて来た。明るい玄關の光のなかへ降りてくるその姿を見ると、それは思ひも懸けぬ料理番の杉谷であつた。二階へ紅茶でも運んでいつたものとみえて、手には大な洋銀の盆を持つてゐる。

杉谷は扉の隙間から敬次郎が覗いてゐるのをみると、向ふでも此方を疑ふやうにじろりと眼を据ゑたが、そのまゝ、ものも云はずにつと自分の部屋の方へ歸つていつてしまふ。

敬次郎は何となくその様子が不思議に思はれてならなかつた。併し唯變だと思つたわけですれより深く考へることはしなかつた。その場合、彼は杉谷といふものと、白金の埵塙とを一緒にして考へることはどうしても出来なかつた。

それからしばらく経つと石井が大きな聲で笑ひながら二階から降りて来た。書齋の入口の



ところで先生と何か笑談でも云ひ合つてゐるやうな様子であつたが、やがて石井は、

『ぢや先生。失禮します。』と、云つて、階段をばたばた降りて來た。

敬次郎は今度こそと思つて、扉を開けて待つてゐると石井はにこにこ笑ひながらノートと参考書のやうなものを片手に持つて彼の部屋へ入つて來ながら、

『おい、安井。俺りや今夜徹夜で勉強せんけりやならんことになつたから、もうゆつくりしちや居られんのだ。君氣の毒だが、そこまで散歩に出んか。一寸君に話したいこともあるしするから、ぶらぶら歩きながら話さうぢやないか。』と、いふ。

敬次郎も何にかしらその方が他人眼がなくていい、やうな氣がするので、そのまゝ、帽子も被らずに石井と一緒に戸外へ出た。

石井は試験問題の話などをしながら暗い屋敷町を本郷の方へ向つて歩いていつたが、今更のやうに先生の學識の深さを頻りに讚美してやまない。この問題こそはと思つて打衝つていくと先生は平氣な顔ですらすらとどんな難問題でも言下に解決をつけて呉れる。その鋭さが

傍でみてゐると却つて憎々しいぐらゐだと云ふ。

そんな話をしてゐるうちに石井はふつと言葉の調子を變へて、

『おい、安井。それはさうと實は俺今夜先生から厭なことを聞かされたのだ。そりや他でもないが、なんでも今日先生の實驗室にあつた白金の坩堝が失つたといふのぢやないか。それに就いて先生は妙な考へを起されたんだ。』と、云つて、一寸間を置きながら、『かう云つたら貴様は怒るかも知れんが、併し事實をありのまゝに云ふと、どうも先生は貴様をそれとなく疑つてゐられるのだ。ものは分つてゐるやうにみえても、先生はあれでなかなか神經質なところがあるからなあ。それに俺に云はせると先生の考へも至極至當だと思ふんだ。そんな思まはしい疑ひをかけられるのは全く貴様が悪いんだ。安井。貴様は怒らずによく冷靜に前後のことを考へてみる。』と、いふ。

敬次郎はそれを云ひ出されると胸に釘を打たれるやうな氣がした。それでなくても、もしや先生が石井に何か話しはしまいかとびく／＼してゐたので彼は思はず急き込みながら、



『ね、石井。まあ兎に角詳しい話は後のことにして、先生は何う云ふ點で僕を疑つてゐられるんだらう。先づ何よりもそれから先に聞かせて呉れんか。』と、云つて、軒燈の光に照らし出された石井の顔をじつとみる。

百五

石井はふつと此方を振向いて、

『そりや分つとるぢやないか。何も彼も貴様が自分で蒔いた種が今になつて芽を吹いて來たんだぢやないか。先生は貴様が夜遊びをしたり女をつくつたりしとることから類推して、金の入用といふことを考へられたのだ。人間は思ひ迫ればどんな悪いことでも知らず識らずやつてしまふものだ。殊に金につまるとどんな人間でも眼先が見えなくなつて、つひ悪い事の方へ手が出る。』

敬次郎はそれを聞くと、渾身の血が湧くやうな氣がして、

『ぢや、石井。先生は僕があゝの白金の坩堝を盗んだと思つて居られるのか？』と、詰め寄つて訊く。

石井は事もなげに、

『まあ、さうだ。貴様が夜遊びをする金に困つて、ひよつとしたら悪心を起こしたんぢやないかといつて、先生は今ひどく心配してゐられた。併し俺は飽く迄貴様の人格を信じとるか、もう言下にそれを否認した。あの安井は決してそんな男ぢやない。人のものを盗んだりするやうなそんな卑劣な人間ぢやない。もし金が必要になればもつと正当な方法で金を作ることも知つてゐる男だと云つて、極力先生の誤解をといたんだ。なあ、安井。まさか貴様いくら金に困つてもそんな真似はしやしまい。どうだ。は、は、は、』

敬次郎は我れながら淺猿しいといふやうな調子で、

『いや、先生は僕をそれほどまでに信用してゐられんのかね。』と、口のなかで云つて、『實は先刻先生に逢つた時も僕はひよつとしたら先生がそんな風に考へてゐられるんぢやないかと



思つて心のなかで恐れとつたんだ。僕が盗みをする。實に何んといふ情ない話だらう。僕は眞面目になつて辯解する勇氣さへないのだ。』

石井はそれには返事もしすにぼくぼく下駄を引摺つて歩いてるだが、しばらくすると嚴格な聲になつて、

『おい、安井。いつぞや俺が忠告したのは此處のことだぞ。まあ、貴様も胸に手を置いてよく考へてみる。貴様は今先生に疑はれたのをひどく口惜しがつとるやうだが、そんなら何故そんな疑ひを受ける原因を明らかに考へてみんのだ。貴様は先生からまでそんな忌はしい疑ひをかけられるほど自分の身が墮落しとるのが分らんのか。實は俺自身にしたつて、心の底では貴様を疑はんとは云へん。あれほど遊んで歩いて、それで貴様には一文たりとも収入といふものはないのだ。いづれ何かで貴様は非常な無理をしとるに相違ない。もう一步貴様が墮落すれば或は盗みもしかねんかも知れん。俺は先生の前では飽くまで貴様の潔白を證明したが、併し翻つて考へてみると、俺は貴様の將來が實に不安で耐らんのだ。』

敬次郎は泣くやうな聲を出して、

『石井。そりや君あんまりな云ひ方だ。僕はそんな男ぢやない。いかに金に困ればといつてそんな盗みをするなんて、……』

『まあ、黙つとれ。貴様それが口惜しかつたら、何故反省をしないのだ。俺がこれほど忠告しとるのに、貴様はまだ眞實の心が眼を覺まさないのだなあ。柳田先生からそんな疑ひをうけるのはよくよくのことだぞ。それが貴様には分らんか。』

『いや、そりやよく分つとる。何も彼も僕が悪いのだ。併し僕は呆たしてそれほどまでに墮落をしてゐるんだらうか。それほどまでに先生の信用を失してゐるんだらうか。僕はそれが何よりも残念で耐らんのだ。』

石井は黙つてじいつと敬次郎の横顔をみてゐた。空には降るやうに星が輝いて、遠い下の町を自働車の警笛が寂しく走つてゆく。



石井は途々いろいろな胸を刺すやうなことを云つて敬次郎に忠告した。自分はそれほどに思はなくとも、貴様はもう女に迷ひきつてゐるのだ、金なども何かきつと無理なことをしてゐるに違ひない。たとへそんな點から先生の疑ひを受けてもそれは怒る譯にはいかない。目下の急務は何ものを措いても自分の將來のことをよく考へて、最も學生らしい潔白な道を執ることである。それが出来ないやうなら俺は決してもう貴様に何の價値も置かないといつていつにない熱の籠つた調子でさんざ云つて聞かせた。

敬次郎はひと言も返事をしらずに黙つて聞いてゐた。自分ながらさうまで墮落してしまつたのだらうかと、何處かしらに恐ろしいやうな氣がして、自分で自分の姿が眼にみえるやうであつた。

そんな話をしあつてゐるうちに二人はつひうっかりして本郷の三丁目の角まで歩いて來て

しまつた。石井はもう時間が遅いからといつて、そこで別れようといふ。敬次郎はせめても二十分でも三十分でも一緒に歩いてゐたかつたが、試験のことを思ふと何となく氣の毒になつて、

『ちや、石井、失敬しよう。』と、云つた。

石井は別れ際にじいつと敬次郎の顔を覗き込んで、

『おい、安井。俺が今夜云つたことはどうか呉れぐれも忘れんやうにして呉れよ。俺は貴様を二人とない親友だと思へばこそこんな心配もするのだ。どうか此れから先も貴様と俺との間には何の誤解も起らんやうに充分發奮してくれ。それが俺の最後の望みなのだ。ちや失敬。』と、云つて、彼はそのまま、下駄の音を高らかに響かせながら大學前の方へ歩いていつてしまつた。

敬次郎はたつたひとりになると、何かしら友達からも保護者からも、それから世間一般の人々からも凡て捨てられてしまつたやうな情なさを覺えて來た。あの清香との關係が人に知



れてゐない爲めに、自分には恩師からさへも忌はしい盗人の名を被せられてしまつたのである。平常の行動や誠實な態度から推したらば、まさかこの自分が盗みをするなどは思ひも及ばぬことだのに、先生は平常から既にもう自分に對して何等の信用も置いてゐて下さらなかつたのであらうか。夜遊びをすることがそれほどまでに悪いことであらうか。さう思つてくると、敬次郎は耐らなくなつて來た。

石井の云つた肺腑を衝くやうな言葉も一々思ひ出されてくる。全く自分は自分で知らない間にさうまで人からは墮落したやうに見なされてゐるのであらうか。誠心誠意といふことに對しては昔と少しも變らぬ考へでやつてゐるのに、それが他人にはもうさう見えなくなつてゐるのであらうか。敬次郎は唯自分の胸の底をみて呉れるやうな人に逢ひ度くて耐らなくなつて來た。腹の底まで打明けて語れると思つてゐたあの石井も、遂に自分を誤解してゐるのではあるまいか。彼にまで清香のことを隠してゐるので、さうなるのも決して無理ではなかつたが、併しそこへいくと清香は頼もしかつた。もう何も彼も打明けて自分に頼つてゐるの

である。彼女は誠實そのもの、やうな心をもつて今自分に對してゐるのである。それを思ふと敬次郎は無上に彼女に逢ひ度くて耐らなくなつて來た。

敬次郎はもう前後の考へもなくなつて、唯足に任せてまた湯島の切通しの方へ歩いていつた。彼の傍には消魂しい警鈴を鳴らしながら、鈴生りに人を乗せた電車が幾臺も駛り過ぎていつた。彼はもう町に往來してゐる人影も何も眼に入らないやうな突詰めた心持ちで急足に歩いていつた。

君の家の軒燈はやがて幻のやうに彼の眼に映つて來た。

## 百七

その晩やつと十一時過ぎになつて清香は息せき君の家へやつて來た。客に連れられて芝居へいつてゐるとか云ふので、彼女は態と地味な着物を着て、そのうへから羽織をきてゐた。敬次郎は何んだか待つ間が頼りなくて、お隆を相手に酒をかぶつてゐたので、清香が來た頃



には可成酔つてゐた。

敬次郎は炬燵をなかに清香とさし向ひに坐つて、さあらぬ話ばかりしてゐたが、そのうちに清香は彼の風を見咎めて、

『ねえ、今夜なんだか、貴方變ねえ。お酒を飲んで被居る割にちつとも氣が浮かないやうね。又どうかしたんぢやないの。』と、心配さうに云ふ。

敬次郎は自分で頬を撫で、みながら、

『いや、格別何んでもないさ。唯今夜は何たか氣が浮かなくつて仕様がななんだ。』と、いつて、盃を清香にさしながら、『どうだい、君も一杯飲んで呉れないか。僕は今夜はどうも飲んだ酒が理に落ちていけない。』と、いふ。

清香はにつこり笑つて受けながら、

『ほんとにそんな心細いことを云ふのはおよしなさいよ。あ、い、お爛でおいしいこと。私は芝居ですつかり寒い思ひをしてしまつたんで、お酒でも飲まないとゐられない。』と、

云つて、敬次郎に酌をして貰ひながら二三杯たてつけにさもうまさうに呷る。

敬次郎はその様をじいつと眺めてゐたが、やがて嘆息を吐くやうに、

『あ、厭だ、厭だ。なんだか馬鹿に氣が減入つて來た。どうしたらいいだらうなあ。』と、  
呟く。

清香はその肩へついと手をかけて、

『あら、貴方。そんな嘆息なんぞ吐いちや厭ですわ。貴方、そんなことを云つて、又喜久子さんとやらのことでも思ひ出したんぢやないの。』と、云ふ。

敬次郎はついと顔を上げて、

『笑談ぢやない。そんなものを思ひ出す位ならこんな思ひはしやしない。そんなことよりも僕は今夜しみじみ食客なんかしてるのが厭になつたんだ。人間は人に使はれるぐらゐ辛いことはない。それを思ふと僕は情なくなつて來るんだ。』

清香は艶やかに笑つて、



「ほ、ほ、ほ。又若旦那のお株が初まりましたわねえ。私もさぞお辛いだらうと思つて、此頃では始終そればかり氣にしておりますの。ほんとに何とかい、方法はないもんですかねえ。」

「いや、僕は辛いから厭だといふんぢやないんだ。どうせ人の下に使はれてゐる體なんだから、主人の爲めには身を粉にして働いたつて僕は決して辛いとは思はん。そんなことはもうとくの昔に覺悟をしてゐるんだ。今度のはそのことぢやない。僕はいくら自分で誠心誠意先生の爲めを思つて働いてゐても、先生はそれをちつとも取上げて下さらないんだ。僕は人に信じられないくらゐ不愉快なことはないと思ふ。」と、云つて、もう我慢してゐられないやうに、「ねえ、お初さん。僕は今夜實に口惜しい目に逢つたのだ。僕は家の先生から盗人の嫌疑をかけられたんだ。」と、云つて、今夜の出来事を包まず隠さず話してしまふ。

清香は呆れたやうな顔をして黙つて聞いてゐた。話が進むにしたがつて彼女は自分までが顔色を變へて一心になつて聞いてゐたがやがて燃えるやうな眼付きをして、

「ちや若旦那。先生は貴方が夜遊びをするから、それでそのお金に困つて、その埒場とかいふものを盗んだんだらうつて仰有るのねえ。まあ、ほんとに随分ですわねえ。」と、いつて、敬次郎の顔をきつと見詰めながら、「そんなことを伺ふと、この私までがほんとに口惜しうござんすわ。それぢや先生もあんまりぢやありませんか。」と云つて、涙ぐんでしまふ。

百八

清香はやがて特性のきかない氣な顔になりながら、

「ねえ、貴方。そんな風なら、もういつそ先生の家を出てしまつたら何うですの。もうほんとにそんな吝つたれな食客なんか止めておしまひなさいよ。物を盗んだなんていはれちや私の大事な貴方に傷がつくわ。いくら先生だつて随分人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。」と、今度は腹立たしさうに云ふ。

敬次郎はやけに酒ばかり飲みながら、



『いや、僕もそれはとうから考へてゐるんだ。故郷を出る時には新聞配達でも何んでもして自分のひとりの力で學校へ通ふつもりでゐたんだ。それに體の樂なことはかり考へて、人の家の書生になんかなつたのが悪いんだ。僕はそれを考へると、どうかしてもう一度故郷を出る時のやうな元氣になり度くつて耐らないんだ。』

清香はそれには返事もしすに黙つて何事か頻に考へ込んでゐたが、やがて何か思ひ決したやうに唇をきつと引結んで、

『ねえ、若旦那、これがい、きつかけですわ。いつともうそんな先生の所なんか出ておしまひなさいよ。そうして何處か此の近邊に下宿を捜して、そこから學校へお通ひになつたらいいぢやありませんか。お金のことなら、私どんな苦勞をしても作へますわ。お金といつたつて下宿するだけならさう澤山も要りやしないんでせう。月に二十五圓もありやそれで足りると思ひますわ。私もこの頃ぢや辻倉さんのお庇護でかうして我儘をして暮らしてゐるんですから、若旦那さへその氣になつて下さりや私それぐらゐるなことはどんなことをしたつて作りま

すわ。』と、思ひ入つた調子で云ふ。

敬次郎は首を垂れて、

『有難う。ほんとにそんなに親切に云つて呉れると僕は全く返事のしやうもないのだ。』と、心から云つて、『併し、お初さん。僕はもうこのうへ君の厄介になることは到底出来ないんだ。今迄にも僕は君に口には盡せない迷惑をかけてゐる。僕はそれが辛くつて仕様がなかつたんだ。それに又今更になつて、君の手で下宿までさせて貰ふ。そんなことは男として到底出来やしない。』

清香はついと敬次郎の肩へ手をかけて、

『あら、若旦那。又それを仰有る。もうそんな水臭いことは云はないつて、あれほど約束したんぢやありませんか。そりや男の貴方には何だか女に貢がれて勉強してゐるのはさもさも意氣地がないやうでお厭かも知れませんが、そこは考へやうひとつですわ。私、あんまり差出がましいやうですけど、それをするのは私ひとりの心意氣なんですもの。私は決して若旦那